

山木戸遺跡第2次発掘調査概報

1999

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟市山木戸386番地ほかに所在する山木戸（やまきど）遺跡の第2次発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、新日観光商事株式会社の分譲住宅建設に伴う事前調査として、同社から新潟市が受託し、新潟市教育委員会が主体となって実施した。
- 3 発掘調査は、平成6年5月9日から8月23日までの期間に実施した。
- 4 発掘調査によって出土した遺物は、すべて新潟市教育委員会が保管している。遺物の注記は「山2次」である。
- 5 本書の執筆編集は小池邦明が中心となって行った。
- 6 墨書折敷・墨書土器の墨書判読は新潟大学人文学部小林昌二教授に依頼し、御指導を得た。
- 7 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の機関及び方々から御協力・御指導を賜った。厚く感謝申し上げます。（敬称略）

新日観光商事株式会社 株式会社井浦測量設計事務所 株式会社内山組 新潟県教育庁文化行政課
新潟市市史編さん課 大川秀雄 小林昌二 坂井秀弥 田中耕作 鶴巻康志 藤塚 明 藤巻正信
本間敏則 前川 要 北陸古代土器研究会 北陸中世土器研究会 日本貿易陶磁研究会

凡 例

- 1 本書で用いた方角はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度20分である。
- 2 土器・陶磁器の拓本は、断面左側が内面、右側が外面を示す。
- 3 遺物実測図のうち、須恵器の断面のみ黒塗りした。
- 4 遺物は、挿図・写真図版とも同一の通し番号である。
- 5 遺跡の位置図は、1万分の1地形図（昭和59年新潟市）による。
- 6 土器外面の←→は被熱などによる剥落を示す。
- 7 曲物断面の←→はへぎ板が入っている位置を示す。
- 8 ----- は土器実測図の場合欠損部分、曲物実測図においては存在するが隠れて見えない部分を示す。
- 9 曲物実測図の - · - · - は推定復元した部分を示す。
- 10 実測図は、土器・陶磁器類及び小型の木製品は4分の1、井戸部材は10分の1で掲載した。

目 次

I 調査に至る経緯……………	1	遺構外出土の遺物	
1 調査に至る経緯		3 中世の遺構と遺物	
2 遺跡の位置と立地		S K 9	
		S E 12	
II 調査の概要……………	2	S E 13	
1 調査区の設定		S E 14	
2 調査の方法		S E 15	
3 基本層序		S E 16	
4 調査の経過		S E 17	
		S D 4	
III 遺構と出土遺物……………	5		
1 遺構の概要		IV まとめ……………	12
2 奈良・平安時代の遺構と遺物			
S X 6			

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置……………	1	第8図 S E 12……………	8
第2図 調査区（1・2次全体）……………	2	第9図 S E 13……………	9
第3図 基本層序……………	3	第10図 S E 14……………	10
第4図 調査区全体図……………	折り込み	第11図 S E 15……………	10
第5図 S X 6……………	5	第12図 S E 16……………	10
第6図 S X 6 カマド……………	6	第13図 S E 17……………	11
第7図 S K 9……………	7		

図 版 目 次

図版1 S X 6 出土遺物(1)……………	13	図版9 調査区A・B地区……………	21
図版2 S X 6 出土遺物(2)……………	14	図版10 井戸・調査風景……………	22
図版3 S X 6 出土遺物(3)・墨書土器……………	15	図版11 出土遺物(1)……………	23
・灰釉陶器・S K 9 出土遺物		図版12 出土遺物(2)……………	24
図版4 S K 9 出土遺物……………	16	図版13 出土遺物(3)……………	25
図版5 S E 12 出土遺物……………	17	図版14 出土遺物(4)……………	26
図版6 S E 14・17 出土遺物……………	18	図版15 出土遺物(5)……………	27
図版7 S E 17・S D 4 出土遺物……………	19	図版16 出土遺物(6)……………	28
図版8 調査区A地区……………	20		

調 査 体 制

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 石井 淳 次長 熊田光男）
総 括	武藤紘一（生涯学習課長）・小林鉄夫（生涯学習課長補佐）・皆川泰男（生涯学習課長補佐）
調査担当	小池邦明（生涯学習課主事）
調 査 員	高橋亮（生涯学習課主事）・長谷川晋一（同）・本間桂吉（同）・渡辺孝博（同） 知野泰明（生涯学習課嘱託）・田中恵津子（同）・諫山えりか
事 務 局	和田明彦（生涯学習課係長）・高橋正幾（生涯学習課主事）
調査作業員	天野雅代・小林愛子・近藤金夫・清田 貞・高橋 詢・星山良作・森 良子

I 調査に至る経緯

1 調査に至る経緯

平成5年8月、新潟市山木戸386番地ほかでの宅地分譲計画が明らかになった。予定地は平成3年に宅地造成に伴って市教育委員会が発掘調査を実施した場所であり、古代・中世の良好な集落跡が発見されていた。市教育委員会は、新たな宅地分譲計画はそれまでの土地利用を変更することとなるため、関係機関と協議を行った。この結果、県教育庁文化行政課から調査済み部分以外で工事により破壊される部分の発掘調査を行うよう指導を受けた。指導に基づいて、建設施行者の新日観光商事株式会社は平成5年11月25日付けで文化財保護法第57条の2第1項の届出を提出した。平成6年4月8日、市教育委員会は新日観光商事株式会社と発掘調査受託契約を締結した。市教育委員会は平成6年4月27日付け新教生第91号により文化財保護法第98条の2にもとづく発掘調査の通知を文化庁長官へ提出し、5月9日から現地調査に入った。調査は5月9日から8月23日の間実施し、597㎡を発掘した。

2 遺跡の位置と立地

遺跡は新砂丘Ⅱ-4に分類される牡丹山砂丘上に立地する。東西に走る標高+1.2m前後の砂丘の北側斜面に位置し、約19,000㎡が発掘範囲と推定されている。調査地の標高は+0.1m前後である。遺跡の北側約1.2kmには旧阿賀野川の流路である通船川が流れており、遺跡との間はその氾濫原にあたる。南側には砂丘間低地を挟んで、牡丹山-中山-近江の集落をのせる標高1m前後の砂丘（新砂丘Ⅱ）が並行している。

周辺の遺跡はいずれも砂丘列・自然堤防上に立地しており、平安時代から中世にかけての時代に限定される。調査の実施された遺跡は少なく、実態は不明である。遺跡の周辺は市街化が進み、住宅や工場が密集して立ち並ぶ。近世以来の村落景観は大きく変貌しており、砂丘の高まりに沿って点在する畑地によって、わずかに往時をしのぶことができる。



第1図 遺跡の位置 (S=1/10,000)

II 調査の概要

1 調査区の設定

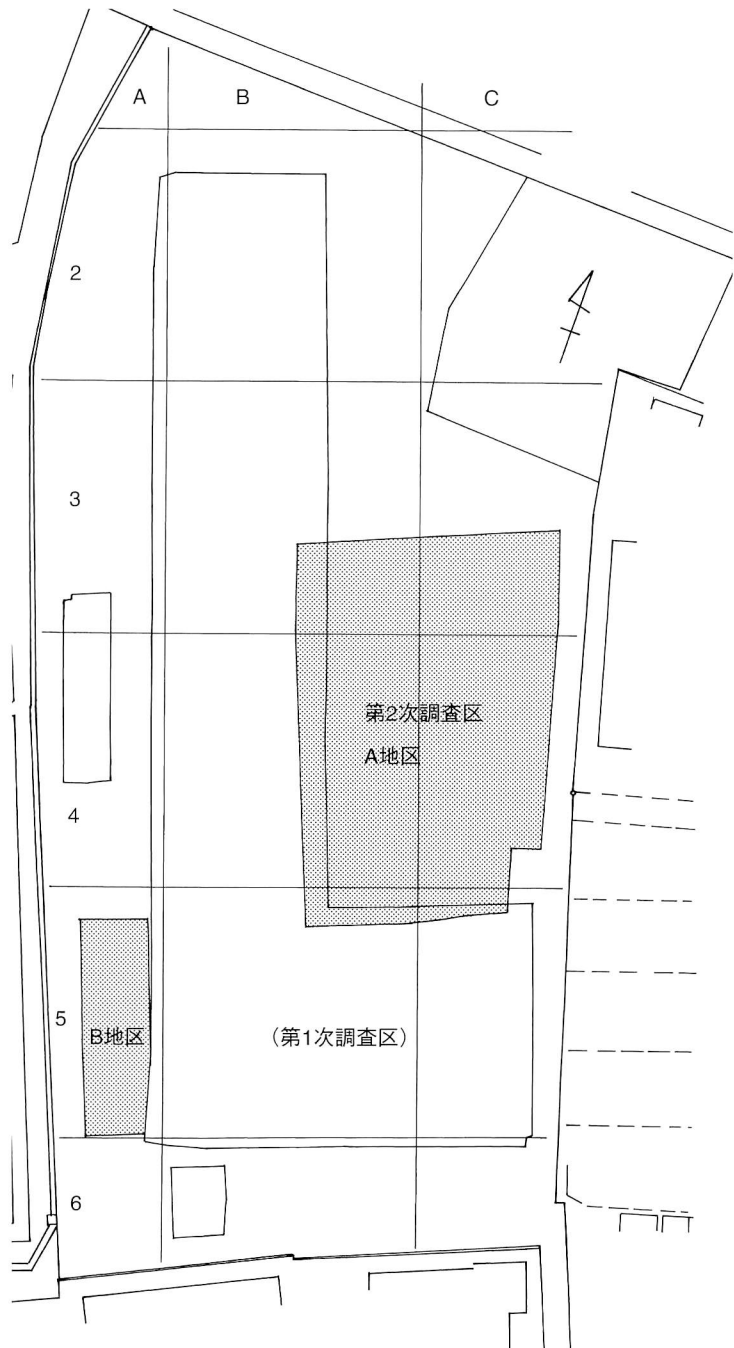
調査区は平成3年度調査（以下1次調査と略記する）地を中心として東側部分と西南部分に分け、それぞれをA地区、B地区とした。当初はA地区のみの予定であったが、調査途中に分譲住宅からマンション建設に計画が変更されたため、調査地点（B地区）を追加した。

グリッド軸は1次調査の設定を基本にした。しかし、調査開始時には1次調査の基準軸原点が存在しなかったためグリッド軸に誤差が生じ、整理作業時に修正した。主軸は真北から約21度西偏する。グリッドは20m方眼を大グリッドとし、さらに4m四方の小グリッドに分割した。グリッドの呼称は大グリッドが東西方向にアルファベット、南北方向に数字とし、小グリッドは北西隅を1番として西から東に数え、南東隅を25番とした（第2図）。

A地区のグリッドは3 B 18～20・23～25、3 C 16～18・21～23、4 B 3～5・8～10・13～15・18～20・23～25、4 C 1～3・6～8・11～13・16～18・21～23、5 B 3～5、5 C 1・2である。西辺および南辺が1次調査区域にかかるように設定した。それぞれ50～80cm幅で基盤砂層まで達する黄褐色の埋め戻し土を検出した。埋め戻し土の掘り下げは行なわなかった。B地区のグリッドは5 A 4・5・9・10・14・15・19・20・24・25である。東辺が1次調査区に接する。東壁上層では埋め戻し土であるが、下層の一部は包含層が残っていた。遺構番号は検出順に付したが、一部整理作業時に付け替えた。

2 調査の方法

表土の除去にはバックホーを使用した。除去は全体に削平およびかく乱が



第2図 調査区（1・2次全体）（S=1/600）

深くみられたため主要包含層の4層上面までとし、以下は遺構の精査を繰り返しながら人力で掘り下げた。包含層遺物は小グリッド単位で取り上げた。遺構内遺物は原則としてレベルおよび出土位置を記録したが、一部は層位ごとに取上げた。遺構測量には平板測量と簡易遣方測量を併用した。レベルは山木戸3丁目の水準点（標高+1.174m）から移動して使用した。

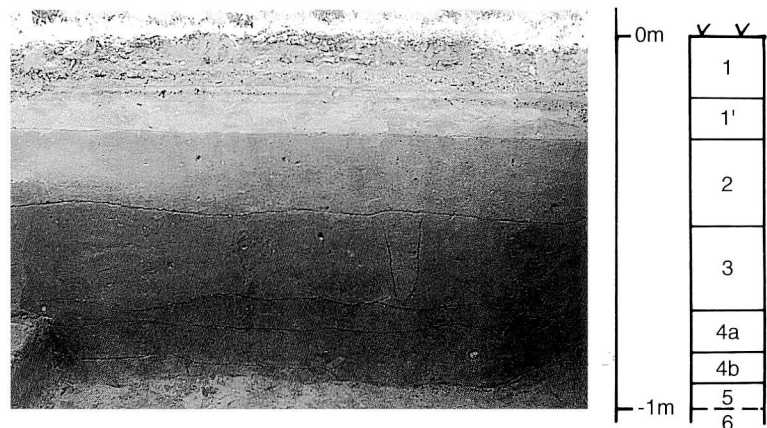
3 基本層序（第3図）

調査範囲は住宅地造成のためすでに整地が終了しており、現地表面の標高は0m前後の平坦面であった。全体にかく乱が多くみられ、北側に向かうにつれて客土が厚くなっている。地山面は標高-1.0mである。

- 1層 表土・整地の埋め立て土 調査地は旧屋敷地であり、その撤去時の埋め戻し土が全体を覆っている。
- 2層 暗黒褐色土 A地区西側部分にかく乱を受けて残存していない。南部の5B・5Cグリッドでは比較的単一な様相を示すが、北部の3Cグリッドでは数枚の層に区分される。近代以降の耕作土である。
- 3層 暗褐色土 2層よりやや褐色をおびる客土層である。固くしまっており、近世・近代の陶磁器から平安・中世の遺物が出土する。
- 4層 黒褐色土 4C・5B・5Cグリッドを中心に存在し、それ以外は削平されているところが多い。平安・中世の遺物包含層であるが、層位的な時代の区分は不可能であった。
- 5層 地山と包含層の漸移層であるが、あまり発達せず、存在しないところもある。遺構はこの層から地山層になって初めて明瞭となる。
- 6層 黄褐色砂 地山の砂丘形成砂である。下層になるほど青みを帯びている。平安・中世の遺構の多くはこの面で検出した。

4 調査の経過

- 5月9日～11日 バックホーで発掘区の表土除去。仮杭打ち。
- 12・13日 機材搬入。
- 16日 現地プレハブ事務所開設、作業員雇用開始。グリッド杭打ち開始。
- 17日 ベルトコンベアーを設置し発掘区東部分から発掘面清掃開始。かく乱が非常に多く労力を要す。
- 25日 A地区東側3C18から南北にはしる溝(SD4)検出。



4C23グリッド東壁土層層序（S=1/20）

- 1、1'層 表土・埋め立て土
- 2層 近代以降の耕作土
- 3層 客土 平安・中世・近世・近代の遺物混入
- 4a・b、5層 遺物包含層（古墳・平安・中世）

※5層上面が遺構確認面となる。

6月1日 5C1で1次調査のSX6

第3図 基本層序

- を確認。1次調査との境界を追求する。
- 7日 4C17から土坑検出。以後順次遺構の調査に入る。
- 8日 SE12調査、井戸側部材出土、以後井戸の検出続く。
- 10日 SX6掘り下げはじめる。覆土中に須恵器・土師器の小破片多く出土。
- 20日 4C7～12のSK20北側の土坑群を精査。
- 23日 SX6の遺物取り上げ。覆土を洗浄のため採集し袋詰めする。
- 7月4日 新日観光商事株式会社から宅地分譲からマンション建設に変更することで依頼があり協議。計画変更に伴い、西側部分約90㎡を新たに調査区に加え（B地区とする）、期間を8月下旬まで延長することとした。
- 5日 A地区北側3C18から遺構平面図作成開始。
- 13日 B地区調査開始。グリッド杭打ち。
- 18日 A地区SX6カマドから土管・支脚出土。B地区SK9確認。
- 21日 A地区清掃、写真撮影。
- 26日 新潟大学工学部大川秀雄教授来跡。B地区噴砂現象の観察及び土壌サンプル採集。
- 8月2日 SK9腐植層から多量の箸等木製品出土。昆虫遺体も多い。覆土を洗浄のため採集する。
- 12日 B地区遺構平面図作成開始。
- 18日 SE13ほか井戸側・曲物取り上げ。2段重ねの井戸は下部の曲物取り上げがなかなか進まない。湧水が激しく砂の流入が多いため、取り上げは難航した。
- 22日 撤収準備。
- 23日 現場より機材を撤収。現地調査終了。
- 9月26日 新教生第483号により新潟東警察署長宛て遺物発見届・埋蔵物保管請書、県教育委員会宛て埋蔵文化財保管証提出。



第4図 調査区全体図

右：A地区

左：B地区

(S=1/120)

Ⅲ 遺構と出土遺物

1 遺構の概要

発掘地は調査区全体にわたって近世以降の削平およびかく乱を受けており、遺構と包含層が良好に残っていたのは調査区の南側約1/3である。遺物包含層の厚さは5～30cmで平安～中世の遺物が混在する。

奈良時代の遺構は竪穴住居（SX6）1棟である。この他に該当期の遺構・出土遺物もなく特異なあり方を示している。平安時代では土坑が5基あり（SK22・23・30・31・32）、A地区内に散在している。中世では井戸6基・溝3基・土坑11基・柱穴などがある。A地区東辺に南北に溝（SD4）が走り、その西側に土坑群、井戸が位置する。遺物包含層が厚く遺構の残りが良好だった南側には、多数の小柱穴が検出されたが、掘立柱建物の規格性を確認できず、建物を復元するにいたらなかった。井戸はいずれも水溜めとして曲物を据えており、井戸側は方形縦板や削り抜き板材で囲うものがある。下部掘形は湧水のため明らかでない。

B地区では大形の土坑SK9のほか小土坑・ピットを検出した。また南壁面およびSK9の遺構外線にそって地震による噴砂現象が発見された(注1)。

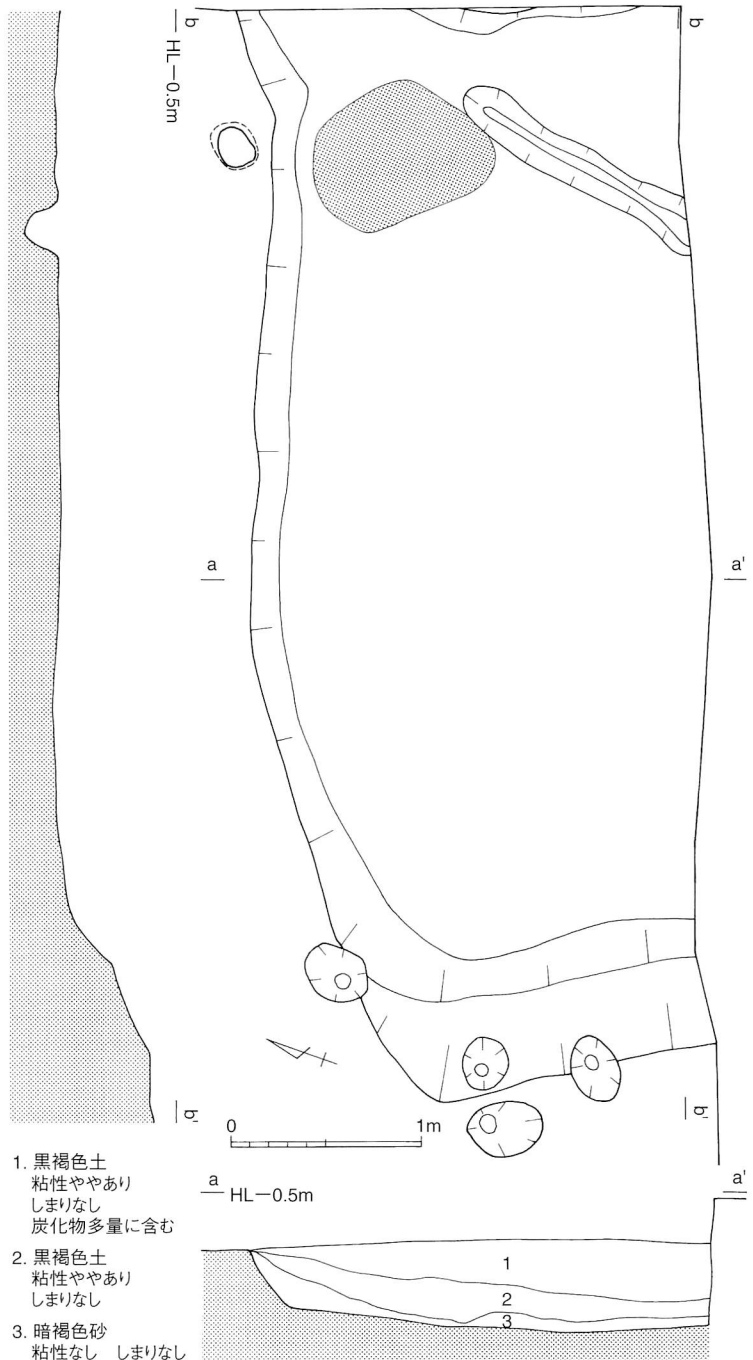
近世以降の遺構は、SD101がある。3C22・23で東西に延び、SD4を切っている。陶磁器皿、播り鉢が出土した。

遺物量は土器類コンテナ約40箱・木製品水槽2基である。土器類は約8割が平安時代に属する。ほとんどが細片で復元できる個体は少ない。木製品は中世の井戸・土坑から出土している。挿図・図版には遺物の主なものを選択して示した。

2 奈良・平安時代の遺構と遺物

SX6（第5・6図、図版1・2・3・8）

5C1・2に位置する。1次調査で性格不明遺構としたもので残存部を調査した。東辺部分は電柱が残されていた



第5図 SX6

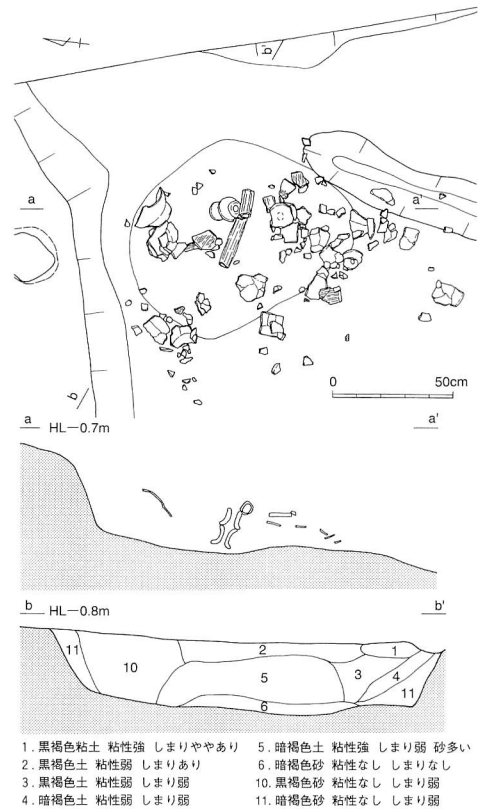
ため未調査地が残る。住居の名称は1次調査と共通性を保つためSXのままとした。全体で東西5.4m×南北4.3mの隅丸長方形で北東隅が膨らむ。確認面からの深さは50cmである。主軸方位は北から東西に偏する角度でN-70°-Wである。床面はほぼ平らで、カマドの南から南西方向に浅い溝が1条走る。床面は常に濡れた状態で湿気が多く、精査したが柱穴は検出できなかった。

カマドは北東部隅に位置する。長さ70cm、幅90cm、高さ25cmの範囲の黄色味がかかった暗褐色砂で遺物が集中して出土した。床面は被熱のためか若干の硬化・赤変が認められた。中央には支脚が2段に重ねて置かれ、その上に土管がのっていた。左右にはカマド袖の芯材としたものか、土師器甕破片が倒立して出土し、炊き口部の周りにも土師器甕破片・支脚が残っていた。煙道は確認できなかった。カマド出土土器は土師器甕のみで土師器碗、須恵器を確認していない。土師器甕は非ロクロのものが主体で聖籠町山三賀Ⅱ遺跡第Ⅰ期に類例が求められ、帰属年代は8世紀初め頃と推定される(注2)。

遺構覆土の1層は炭化物を含む黒褐色土で須恵器杯・土師器碗を中心とする小破片が多数出土した。2層は暗褐色砂で遺物量は少なく、1層中出土遺物と接合するものがある。3層は地山に類似した褐色砂で遺物はごく少量である。遺構覆土の遺物は9世紀後半から10世紀前半頃のものであり、カマド出土遺物とは時期が異なる。住居廃絶後に土器の廃棄場として利用されたものと思われる。

図示したのは出土遺物の一部である。(図版1) 1~14はカマド出土遺物である。1~10は非ロクロ成形の土師器甕で、内外面にハケ目調整を施すものが多い。1・2は頸部で明確に屈曲し、口縁が直線的に開く平底の器形である。外面は被熱により赤化し、剥落している。1は口径21.1cm、高さ24cm、底径8.8cm、2は口径17.2cm、高さ19.6cm、底径9.4cm。3・5は頸部がゆるくくびれる器形。4・6・8は胴部・底部破片である。7は平底で外面へラ磨きである。8は丸みを帯びた底部で、底面から胴部まで丁寧にハケ目調整が施される。9は大形甕の底部破片である。丸みのある底で厚さは2.7cmを測る。10は薄手の甕で内面横方向のハケ目調整。11~13は土製支脚で、11と12が2段に重なって出土した。いずれも中心が貫通し、外面に指頭痕が残る。被熱により赤化し、もろい。口径6.2~6.5cm、高さ8~8.6cm、底径7.7~8.2cm。14は土管で一端を欠損する。粘土板を棒に巻きつけて成形している。外面は細かくへラナデして一部を磨く。内面はナデで長軸方向にしわがよっている。口径5.3cm、残長33.1cm。

15~43は遺構覆土出土遺物である。15~23は須恵器である。杯蓋(15・16)、杯(18~26)、有台碗(27・28)、壺(29・30)、甕(32・33)の器種がある。杯のうち21~23・26は、薄手で胎土に白色粒子を含み佐渡小泊産と思われる。28は底部に「寺」の墨書がある。23~43は土師器である。33~35は碗。34・35は墨書があるが意味は不明である。36・37は黒色土器碗で内面のみ黒色処理される。38は緑釉陶器素地で碗であろう。高台を削り出し内外面を磨いている。胎土は精良である。39は柱状高台皿の底部に類似するが器種は不明である。41~43はロクロ成形の長胴甕である。いずれも頸部が「くの字」状を呈し、丸底の器形である。上半

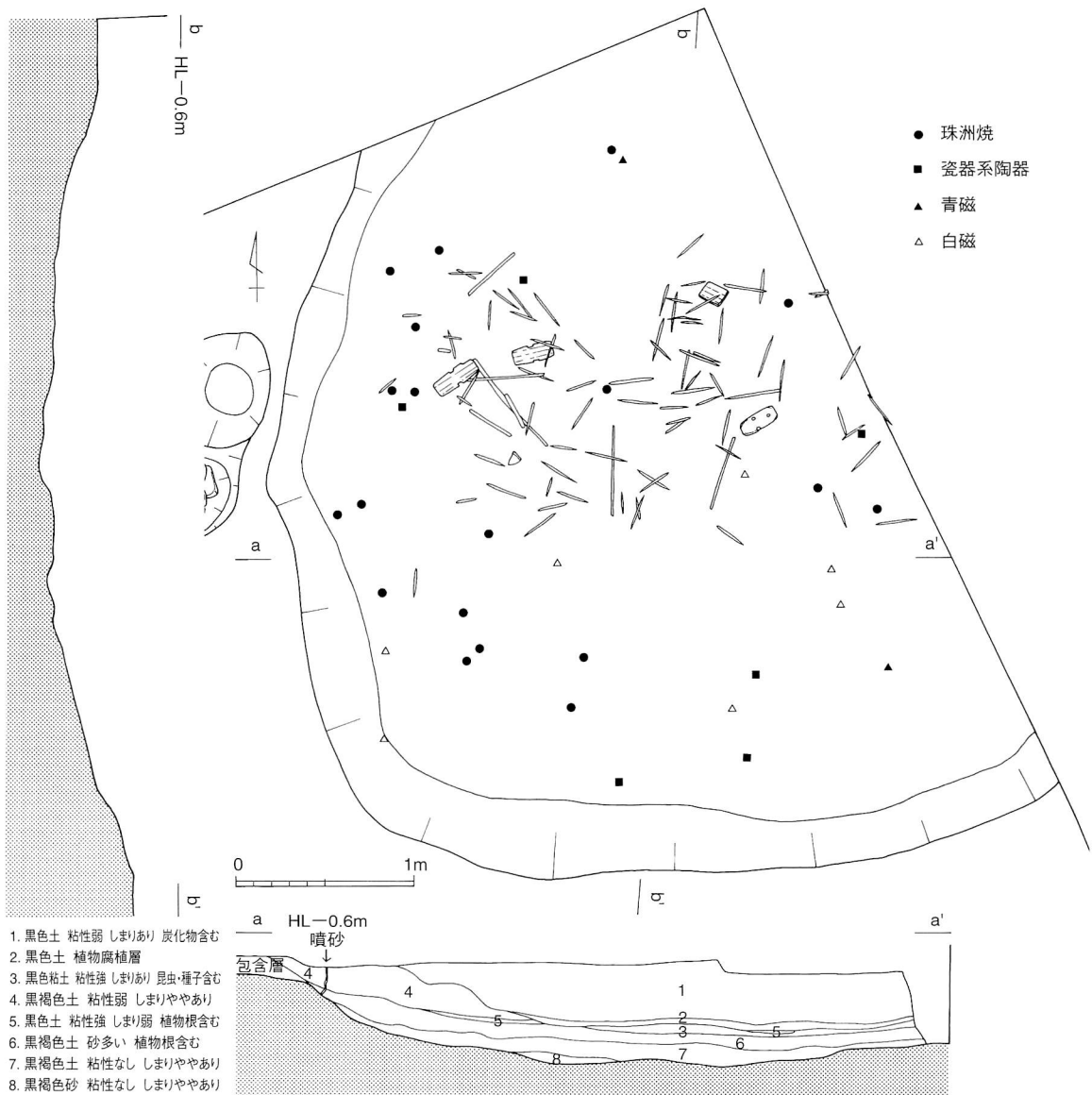


第6図 SX6 カマド

部内外面カキ目、下半部はタタキ調整が施される。このほか小甕も数個体確認されている。40は移動式かまどの破片と思われる。砂を多く含む胎土で、外面は縦のハケ目、内面へら削り痕がある。このほか銭貨が1点（図版12）、細形土錘1点が出土している。

遺構外出土の遺物 遺構外の遺物は包含層4層を中心とし、下部の5層、上部の3層及びかく乱層から出土している。土器は、須恵器の無台杯・有台椀・杯蓋・長頸壺・短頸壺・甕・京都篠窯産鉢、土師器の椀・黒色土器椀・小甕・長胴甕・鍋、緑釉陶器の椀・皿、灰釉陶器の椀・皿など器種があるが、多くは小破片で、復元できるものは少ない。

44～50は墨書土器である。全体では32点出土したが、1字だけ書かれるものが多く、文字のほとんどは判読できない。文字は44「村」、46「井」、47「キ」、48「衣」、50「大」で、45・49は判読不能である。51～55は灰釉陶器の椀・皿である。ややざらついた胎土で猿投産K90様式である(注3)。全体で約40点の小破片がある。緑釉陶器は図示していないが、京都産が主体であり、小破片約30点が出土している。銭貨では萬年通宝1点、銭種不明（隆平永宝か）1点がある。そのほか中世と時期区分できないが、土製品では土錘、土器片円盤、鍛冶滓や鉄製品等があり、焼けて白骨化した魚骨細片も少量採集された。




第7図 SK9

3 中世の遺構と遺物

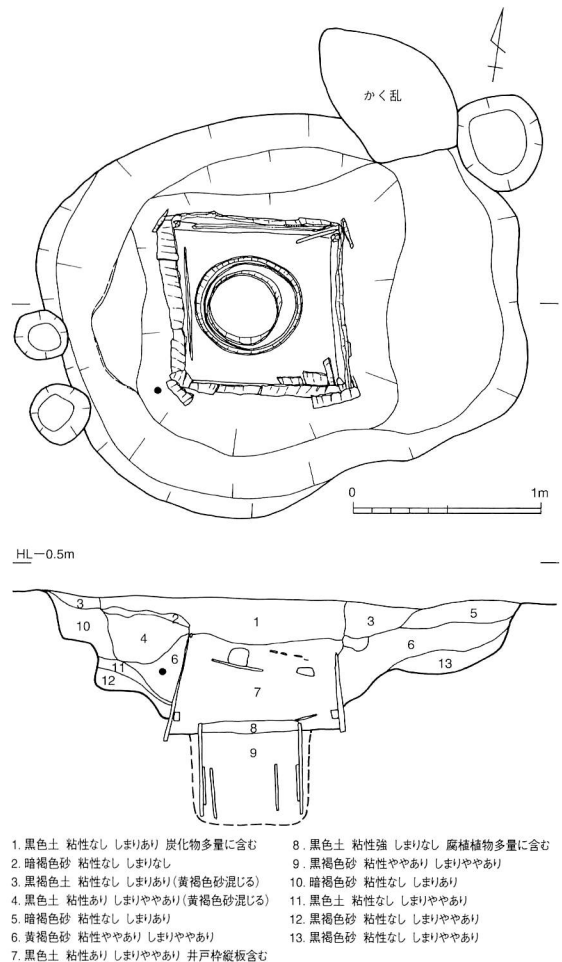
SK9 (第3・4図、図版4・13・14) B地区5A9・10に位置する。1次調査で東部分を調査しているが今回の調査では接していない。長軸約5m、短軸約4m、深さ60cmの不整隅丸方形で、断面は浅いレンズ状を呈する。覆土は粘性のある黒色土で腐植植物を含む。特に3層から土器のほか多量の箸をはじめとする木製品、昆虫遺体、種子が出土した。トイレ遺構の可能性が考えられたので、覆土を採集し整理作業時に調査したが、寄生虫卵・遺体は発見されなかった(注4)。廃棄土坑と考えられる。また、幅1cmほどの砂の立ち上がりが遺構の外形線やや内側に沿って巡っており、地震による噴砂現象と確認された。地震の年代は不明である。

56は白磁椀である。57~71は珠洲焼である。57は甕肩部破片、58~62は壺胴部破片、63~69は片口鉢である。70は壺底部、71は小型壺の底部であろう。72~74は瓷器系陶器である。72・73は同一個体で外面に厚く自然釉がかかる。74は外面に簾条の印刻文がある。75は胎土が粗く、砂や直径1~2mmの小石を多く含んでおり、五頭山麓窯の可能性はある。76は平安時代の石帯巡方である。縦4.05cm・横4.25cm・厚さ0.75cm・重さ28.0g、黒色粘板岩製である。表面及び側面はよく研磨されている。裏面は潜り穴4カ所あり、斜めの擦痕が残る。1次調査でもSK9近くの包含層から石帯鈍尾1点出土している。77は硯で上面の一部が残っている。78は小型の砥石である。

79~90は木製品である。79は内外面黒色漆塗の椀である。胴部外面に「木」、底部内面に「森」の字が朱書され、また底部外面には「」の文様が線刻されている。口径10.2cm、底径6.1cm、残高3.9cm。80は椀である。81・82は柁目板、83は棒状木製品である。84~87は箸で、長さ15~25cm、径0.6mmを測る。全部で100点以上出土している。88は差歯下駄で、表面かかと部分に79の椀と同じ線刻がある。長さ24.4cm、幅9.5cm。89・90は草履状木製品である。2点とも長さ24.2cm、幅10.8cmで規格が一致している。一揃いで使用されたものであろう。

SE12 (第8図、図版5・14・15) 4B15・20、4C11・16に位置する。上面は2.5×2.1mの隅円長方形で、東側が幅50cmほどの低い段となって張り出す。井戸側は一辺90cm、残存高60cmの方形縦板組で下部に水溜めの曲物を設置する。検出面から水溜め底までの深さは130cmである。井戸側は基底部に組んだ横棧の四隅に支柱を置き、外側を幅10~50cmの縦板で囲む。四隅の外側にはさらに一枚ずつ縦板を配置している。内側には横棧と縦板の間に補修のためか縦板・曲物底板・折敷断片が差込んであり、折敷断片には墨書が記されていた(103)。覆土上部には上段の横棧が残存していた。水溜めは曲物の内部に浅い曲物を密着させて組み入れ、さらにその内側に口径の小さい曲物を入れていた。

出土遺物は中世の青磁・珠洲焼数点と平安時代の須恵器・土師器破片、井戸部材、曲物がある。91は平安



第8図 SE12

時代の京都篠窯産の須恵器鉢底部である。底径10.3cm、胎土は精良で黒色粒子を含む。92は青磁の鉢あるいは盤の口縁部、93は青磁蓮弁文碗、94は珠洲焼甕である。95は瓷器系陶器の中甕で、口径23cm、胴部最大径39cmを測る。胎土は石英粒が多く粗い。笹神村狼沢窯製品に類似する（注5）。96～98は水溜めの曲物である。96は口径55.6cm・高さ50.5cm、97は口径45cm・高さ19cm、98は口径39cm・高さ27cmである。内面にタテケビキを入れている。103は墨書折敷である。右半分を欠損し、表面左端が一部剥落する。ところどころに刃物傷がある。縦26.9cm、幅12.8cm、厚さ0.5cm。墨書は中央に3行書きされている。積文は、以下のとおりであるが文意は不明である。

「その□□

所々の条々□

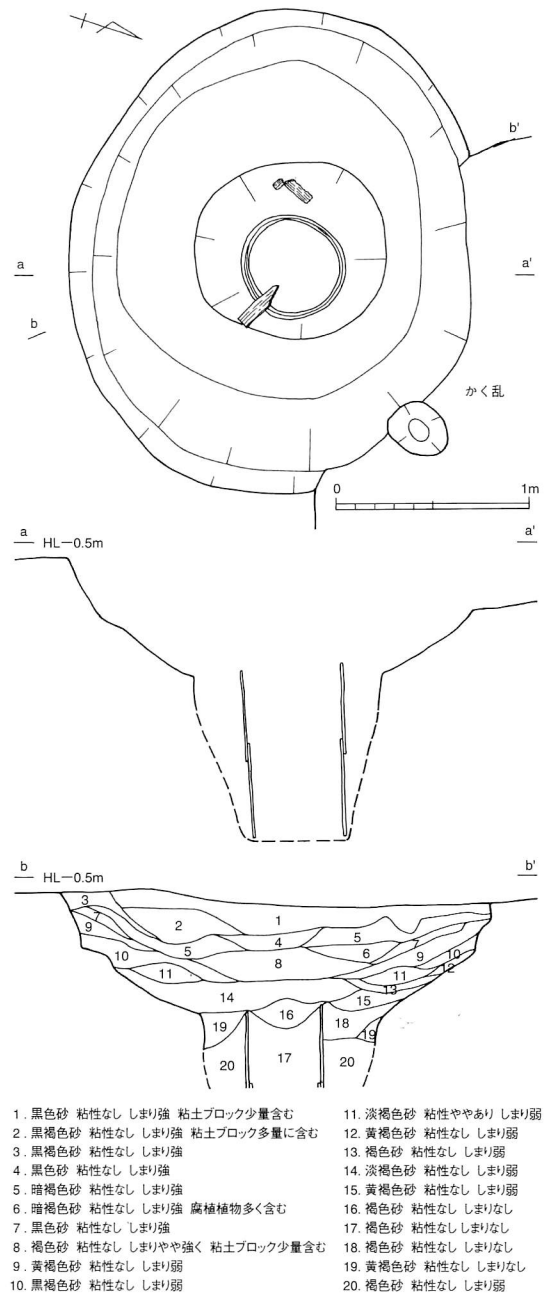
存こそハ一□た□」 061型式

SE13（第9図） 4 B 24・25、5 B 4・5に位置する。4.25×2.2mの楕円形で、井戸側はなく中央に水溜めの曲物を2段に重ねて据える。深さは水溜め底まで1.3mである。上段曲物は口径53cm・高さ51cm、下段曲物は口径48cm・残高18cmである。

遺物は、平安時代の須恵器・土師器小破片・土錘があり、中世遺物は出土していない。覆土の様子から帰属時期は中世と推定している。

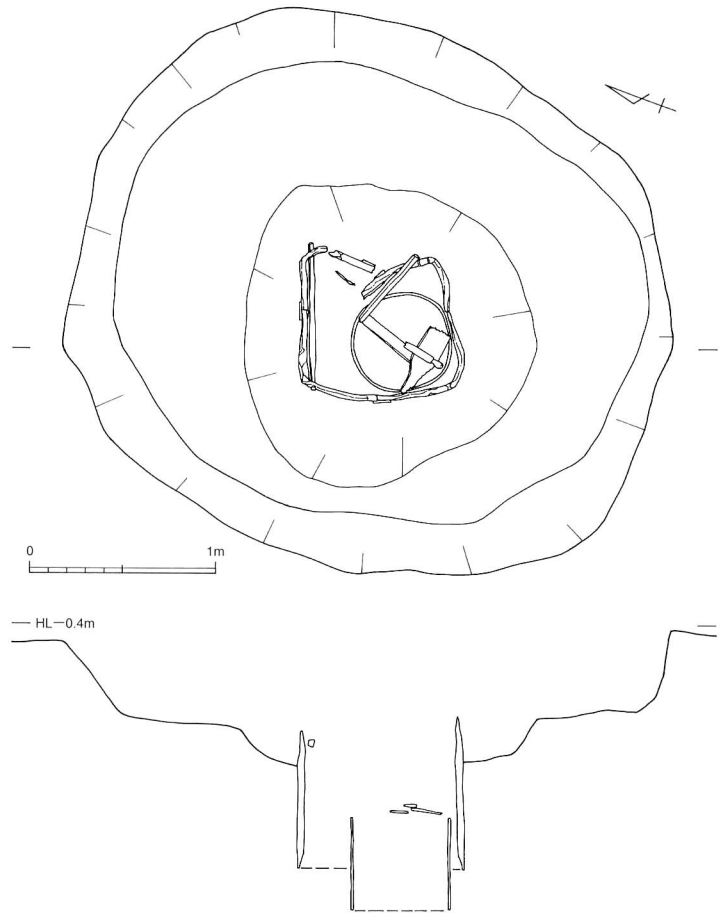
SE14（第10図、図版6・15） 4 B 5・4 C 1に位置する。3.2×2.8mの不整円形を呈し、深さ約40cmで平坦面を作り、中央に井戸側を設置する。井戸側は一辺70～80cm、残高80cmの隅丸方形で、一木を4分割してL字形に削り抜いたものを組み合わせている。底部から上方70cmのところの四角穴を4カ所あけ、横棧状の角材を渡していた。水溜め曲物は井戸側東部が押し潰されたためか南西に偏っていた。水溜め曲物底面までの深さは1.4mである。

出土遺物は、平安時代の須恵器・土師器小破片、青磁・珠洲焼、井戸部材等木製品があり、中世の遺物は少量である。104は青磁蓮弁文碗で水溜め曲物内から出土した。105は青磁碗底部片である。106・107は珠洲焼播鉢である。108は井戸側を組み合わせるためのほぞ穴のくさびである。109から111は縦板、112はヨコヅチ状の木製品で、下端は黒く焼け焦げ、欠損している。113は水溜め曲物で口径53cm・高さ41cm、外側のたがは3段に分割している。



第9図 SE13

SE15 (第11図) 4 C11に位置する。径1.2mの円形で、深さは80cm。井戸側は残存せず、水溜め曲物(口径68cm・高さ48.3cm) 1基がある。曲物の上部に横棧と思われる2本の木製品が、直角に交差するように残存していた。遺物は曲物のほか青磁小破片、平安時代の須恵器・土師器、灰釉陶器が出土した。



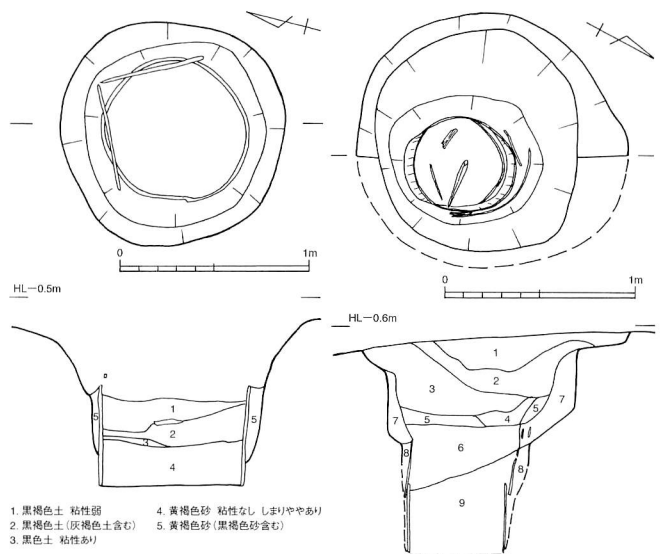
第10図 SE14

SE16 (第12図) 3 B24に位置する。径1.2~1mの不整形円で東側半分がかく乱を受けていた。井戸側は残存せず、曲物を2段に重ね水溜めとしている。深さは水溜め底まで1.15mである。上段曲物口径53cm・残高30cm、下段曲物口径51cm・残高36cm。遺物は平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器、折敷断片、箸が出土した。

SE17 (第13図、図版6・7・15・16)

4 B 4 に位置する。上部は東側を残してかく乱を受けていた。上部の径2.9~2.6mの不整形円形である。深さ45cmで平坦面を作り、中央に井戸側、水溜を設置する。深さは水溜め底まで1.33mである。井戸側は一辺85cm、残高50cmの方形縦板組みである。底部に横棧を組み、隅柱は立てずに周囲を幅30cmほどの縦板で囲っている。内側に曲物を2段に重ねて水溜とする。

出土遺物は平安時代の須恵器・土師器破片が多く、中世の遺物は少ない。117は玉縁状口縁の白磁碗、114は珠洲焼片口鉢、115・116は珠洲焼壺、118・119は手づくねの土師質土器小皿、118の口径7.4cm、底径3.5cm、高さ1.3cmである。120~123は横棧である。長さ80cm、幅6~8cm。124は井戸側の縦板、下端をくさび状に削っている。残存長59cm・幅28cm。125は水溜の上段曲物で口径67cm・高さ53cm、126は下段の曲物で口径53cm、残高43cm。



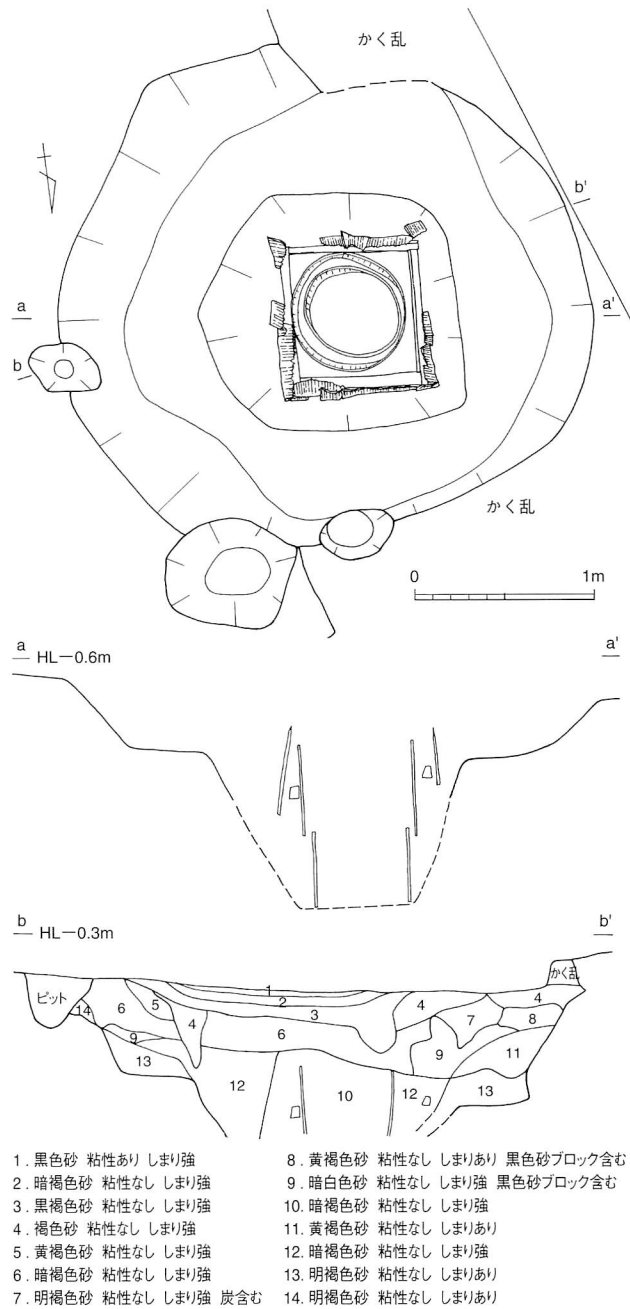
第11図 SE15

- 1. 黒褐色土 粘性弱
- 2. 黒褐色土(灰褐色土含む)
- 3. 黒色土 粘性あり
- 4. 黄褐色砂 粘性なし(しまりややあり)
- 5. 黄褐色砂(黒褐色砂含む)

- 1. 暗褐色砂 粘性なし(しまりあり)
- 2. 黒色砂 粘性弱(しまりあり)
- 3. 暗褐色砂 粘性なし(しまりなし)
- 4. 黒色砂 粘性あり(しまりあり)
- 5. 暗褐色砂 粘性なし(しまりなし)
- 6. 黒褐色砂 粘性弱(しまりあり)
- 7. 明褐色砂 粘性なし(しまりなし)
- 8. 暗褐色砂
- 9. 黄褐色砂

第12図 SE16

SD 4 (図版7・16) 3 C 18から4 C 23までA地区東側を南北に走る。4 C 23でSD 6を切っている。溝は幅約1.2m、深さ0.4m。南端部分が未調査のため、1次調査の溝(SD 1)との関係は不明であるが同一の可能性はある。東側に幅約40cm、深さ10cmほど西側に拡張されている。遺物の多くは拡張部から出ている。127はロクロ成形の土師質土器小皿である。128は白磁小皿である。129~138は珠洲焼である。129は甕の同部、133・134・137は片口鉢である。137~141は瓷器系陶器である。143は滑石製の石鍋である。内面には擦痕が残り、外面には煤が付着する。



第13図 SE17

- 注1 新潟大学工学部大川秀雄教授にご教示を得た。
 注2 坂井秀弥ほか1989『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
 注3 富山大学前川要助教授にご教示を得た。
 注4 新潟市衛生試験所本間敏則氏の顕微鏡観察結果。
 注5 新発田市教育委員会田中耕作氏、鶴巻康志氏のご教示を得た。

Ⅳ まとめ

山木戸遺跡 2 次調査では、奈良・平安時代から中世、近世にわたる遺構・遺物が出土した。2 次調査で出土した古墳時代の遺物は小片数点を確認したが、高坏の坏部破片などのため、時期は特定できない。奈良時代については、8 世紀初めに集落が形成されるが短期間で廃絶されている。その後集落が形成されるのは平安時代の 9 世紀後半～10 世紀前半と中世の 12 世紀後半～16 世紀代であり、この間に集落が途絶する期間がある。近世の遺物も少量見つかっているが、かく乱や客土中からの出土が多く、集落としての継続は認めがたい。

奈良時代では、遺構は堅穴住居 1 棟とわずかなカマド出土遺物しか検出されておらず、集落の構成は不明である。遺物は非クロロの土師器甕が主体である。時期比定の基準となる須恵器・土師器碗がなく、年代や地域性については再検討が必要である。

平安時代は遺物量からは本格的に集落が形成されるものと思われるが、遺構はわずかに土坑を確認したのみで多くを知ることができない。しかし、緑釉陶器・灰釉陶器は破片ながらも一定量存在し、石帯も出土している。これらは一つのセットとしてとらえられ、9 世紀後半に比定される。このほか皇朝銭・京都篠窯須恵器大平鉢など希少品があり、これらの遺物からは、一般集落ではなく官衙関連遺跡の可能性が高い。

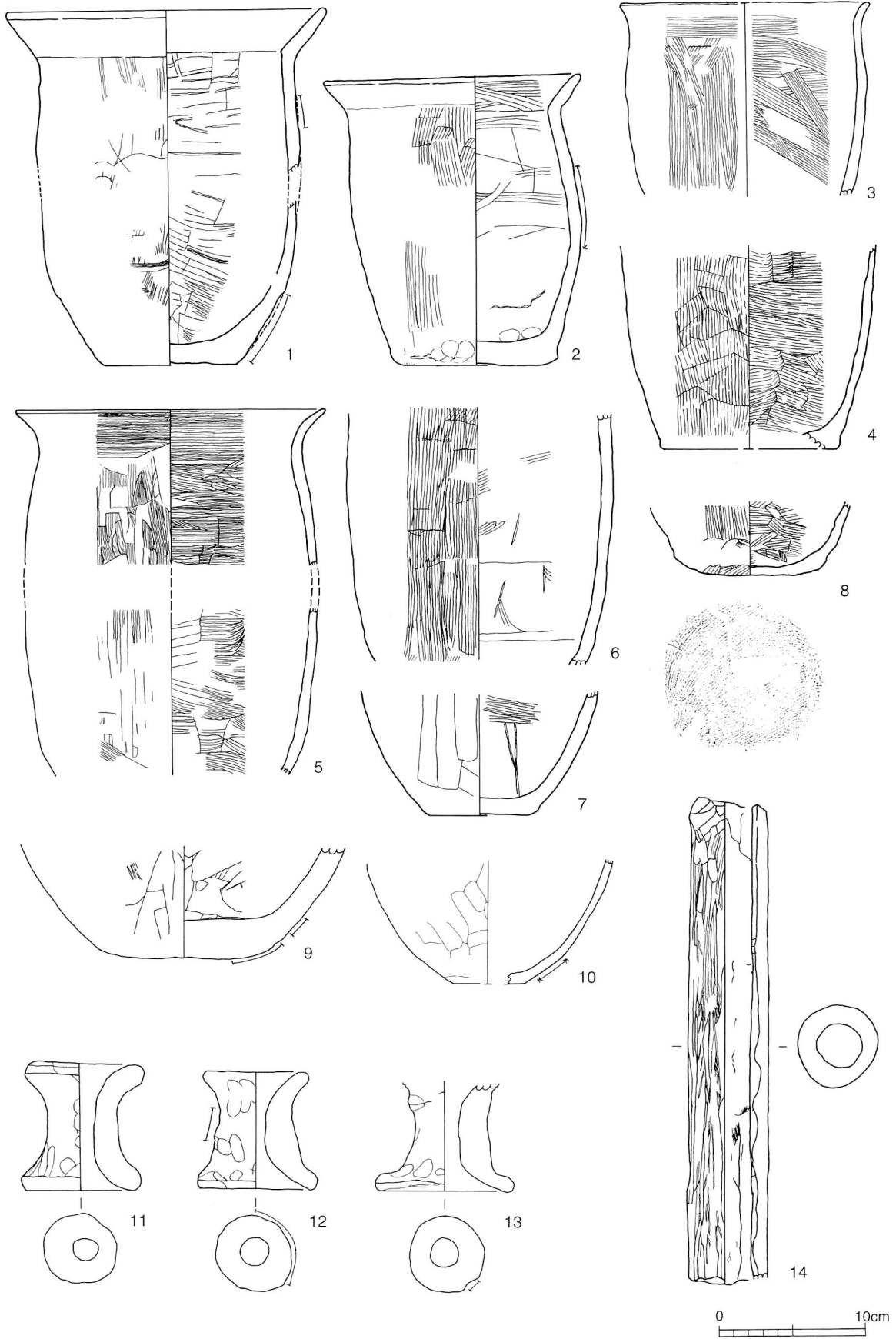
中世では溝・井戸・柱穴が検出されているが、掘立柱建物の復元が不可能なため集落の構成は明確ではない。2 次にわたる調査では合計 17 基の井戸が発見されており、調査面積に比べ多い。砂丘上に作られるため素掘りのものはなく、いずれも水溜として曲物を設置している。部材に、柁目で木取りされているものがあり、年代測定資料として良好なものもある。遺物は 12 世紀後半から 14 世紀代のものが主体である。組成の主体は珠洲焼、白磁・青磁の中国陶磁器等遠隔地からの搬入品であり、土師質土器はわずかである。この組成は一般集落としては特異といえる。

このほかに、時期は限定できないが、刀子等の鉄製品および鉄滓・羽口などの鍛冶関連遺物がコンテナに 3 箱ほど出土している。また、近年事例が増加している地震の噴砂現象が確認されるなど、多角的な検証が可能な遺跡である。

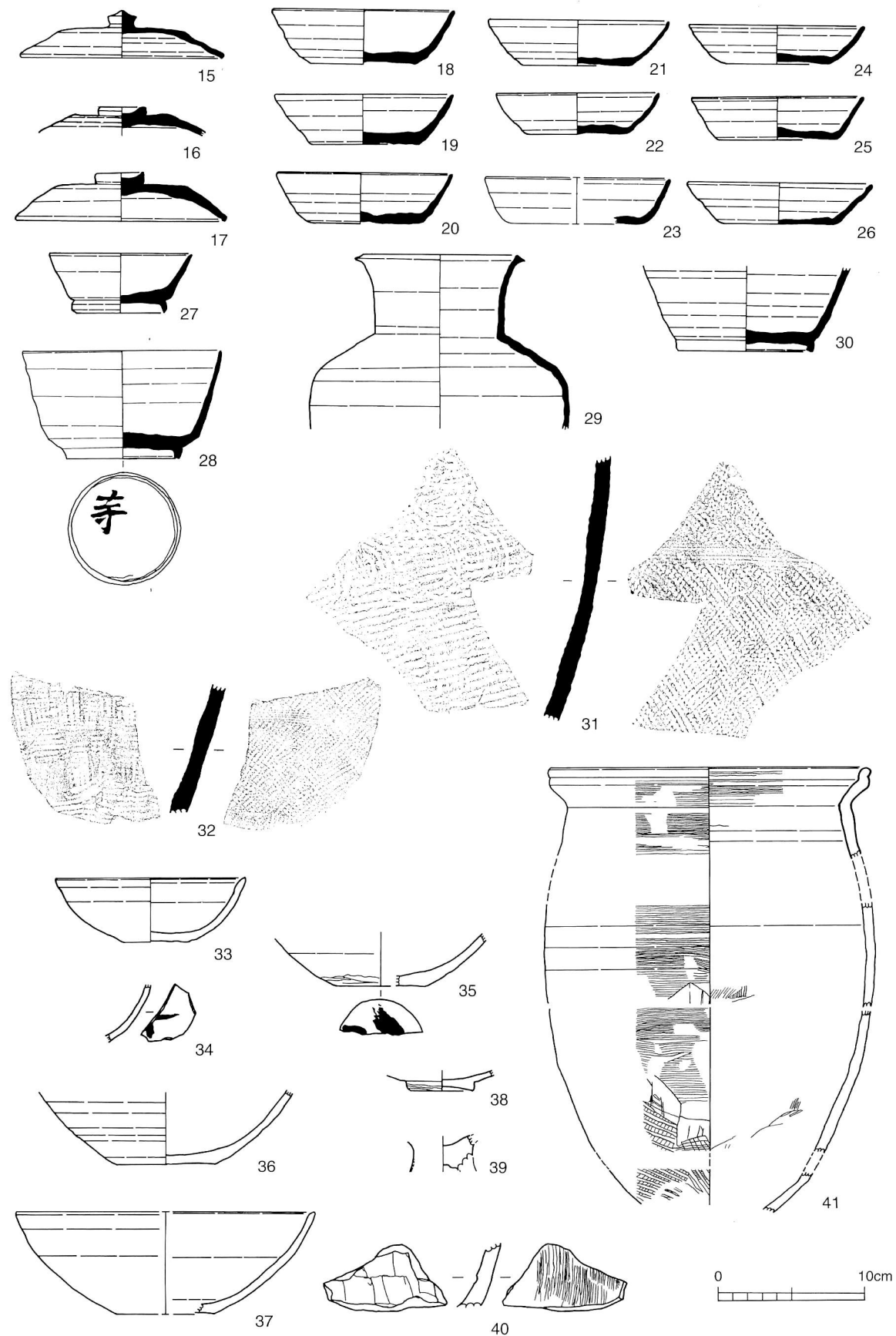
今後本報告にむけて、遺物の組成・出土傾向等を検討し、山木戸遺跡の性格を捉えるよう努めたい。

参考文献

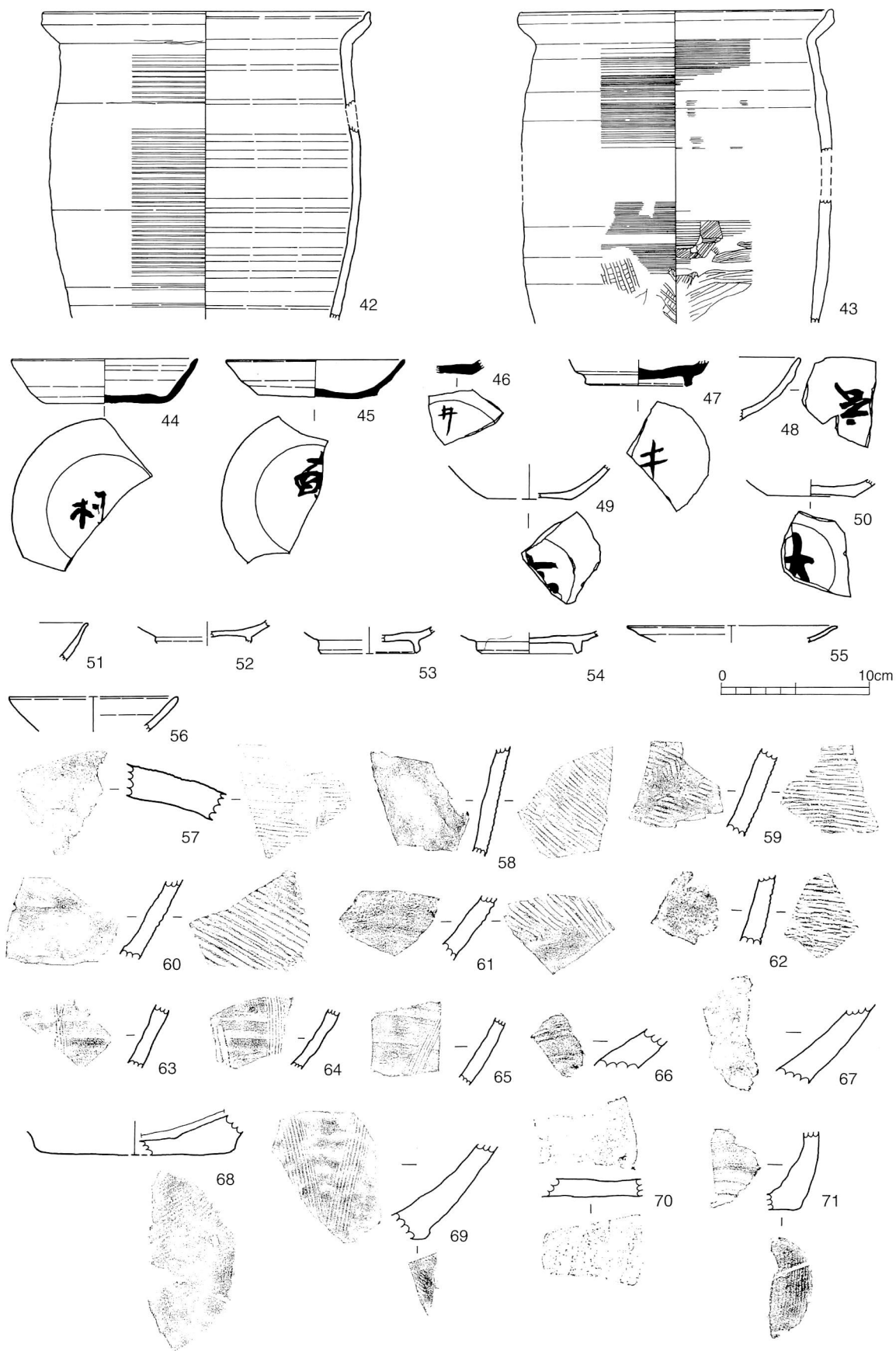
- 1 石井清司 1983 「篠窯跡出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第 7 号
- 2 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』65 卷 5 号
- 3 坂井秀弥ほか 1987 『番場遺跡』新潟県教育委員会
- 4 坂井秀弥ほか 1989 『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
- 5 山本信夫 1990 「11・12 世紀の貿易陶磁器—太宰府出土例を中心として—」『貿易陶磁研究』第 10 号
- 6 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 7 横田賢二郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 号



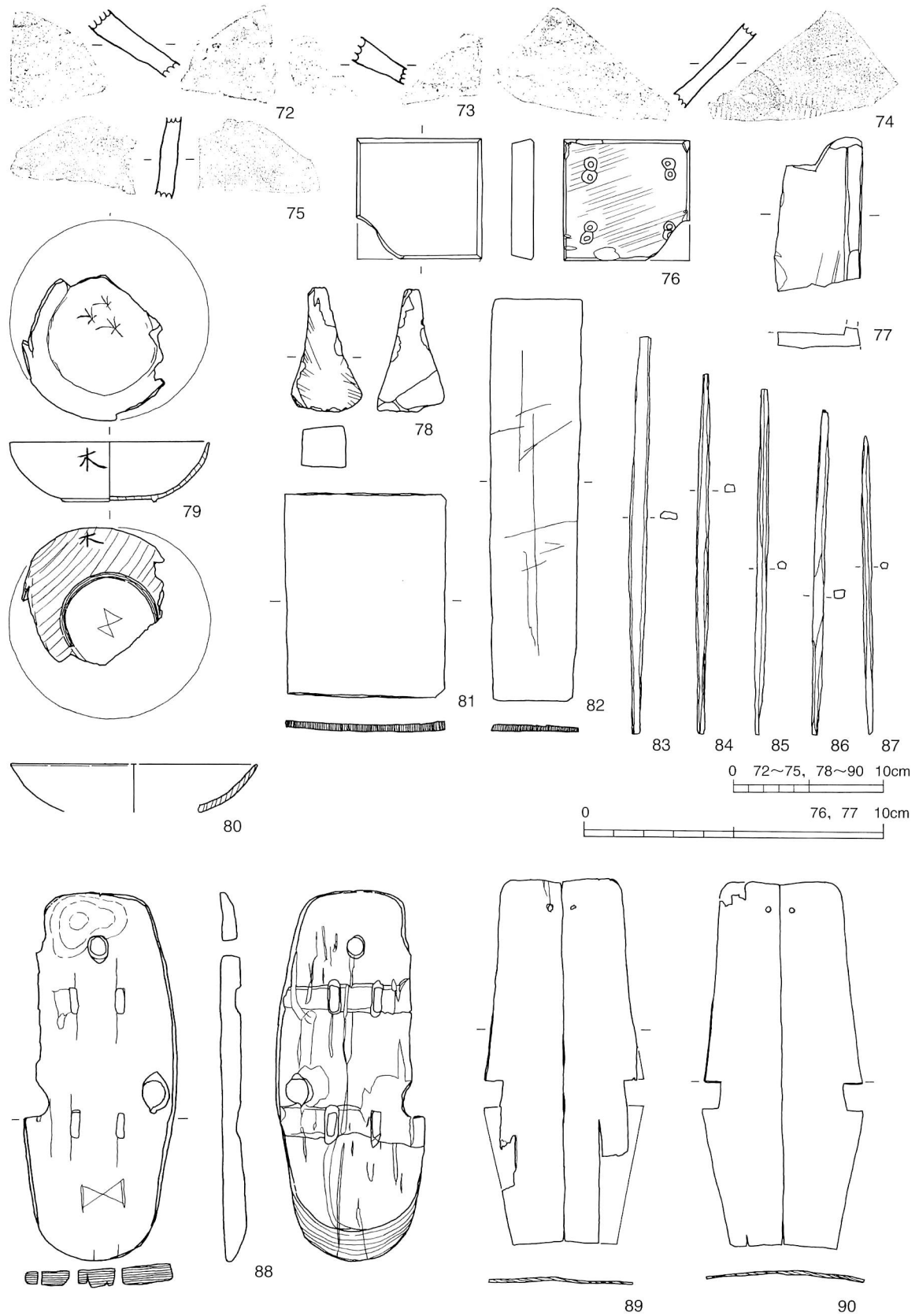
图版2 SX6出土遺物(2)

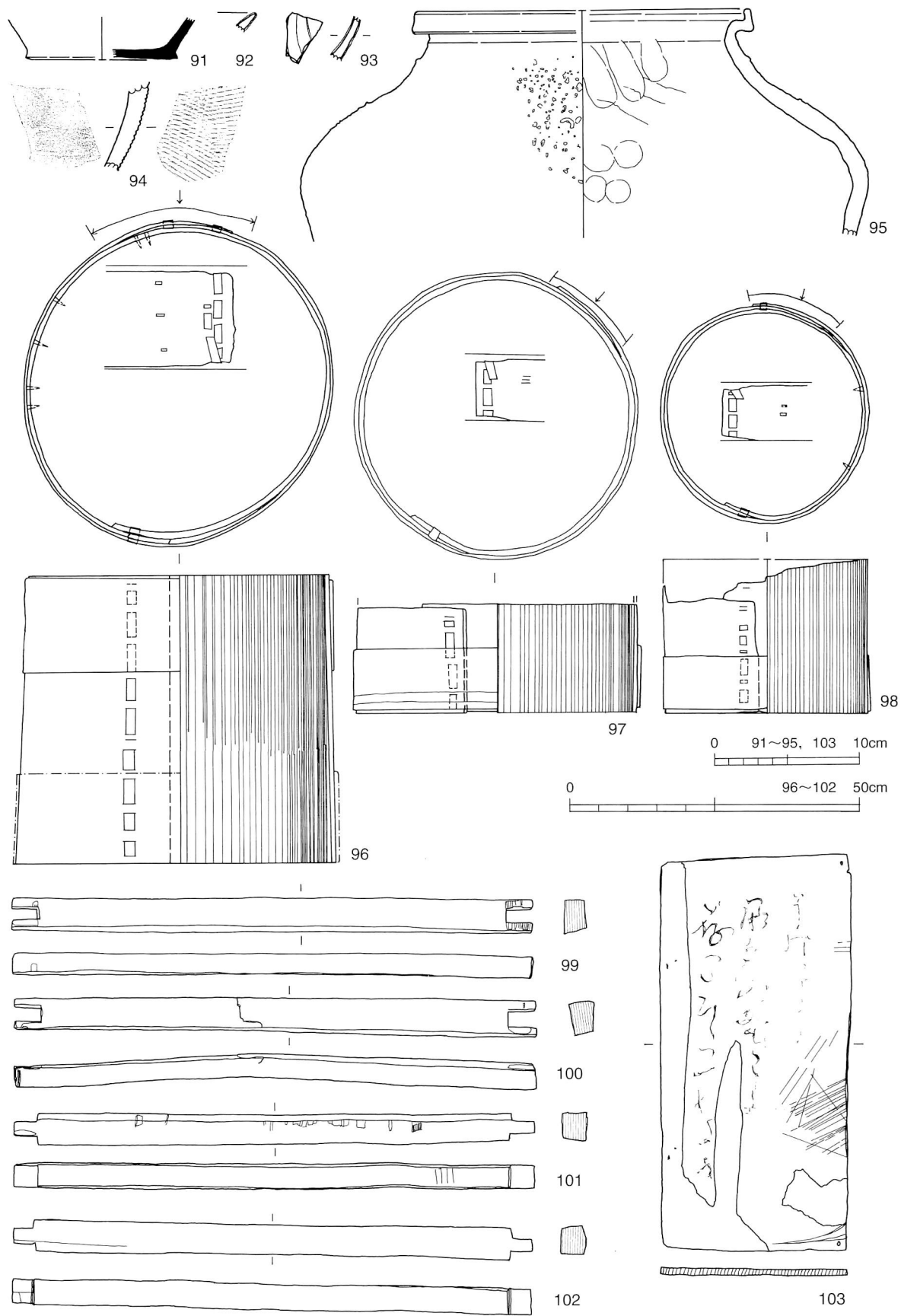


图版3 SX6出土遺物(3)・墨書土器・灰釉陶器・SK9出土遺物

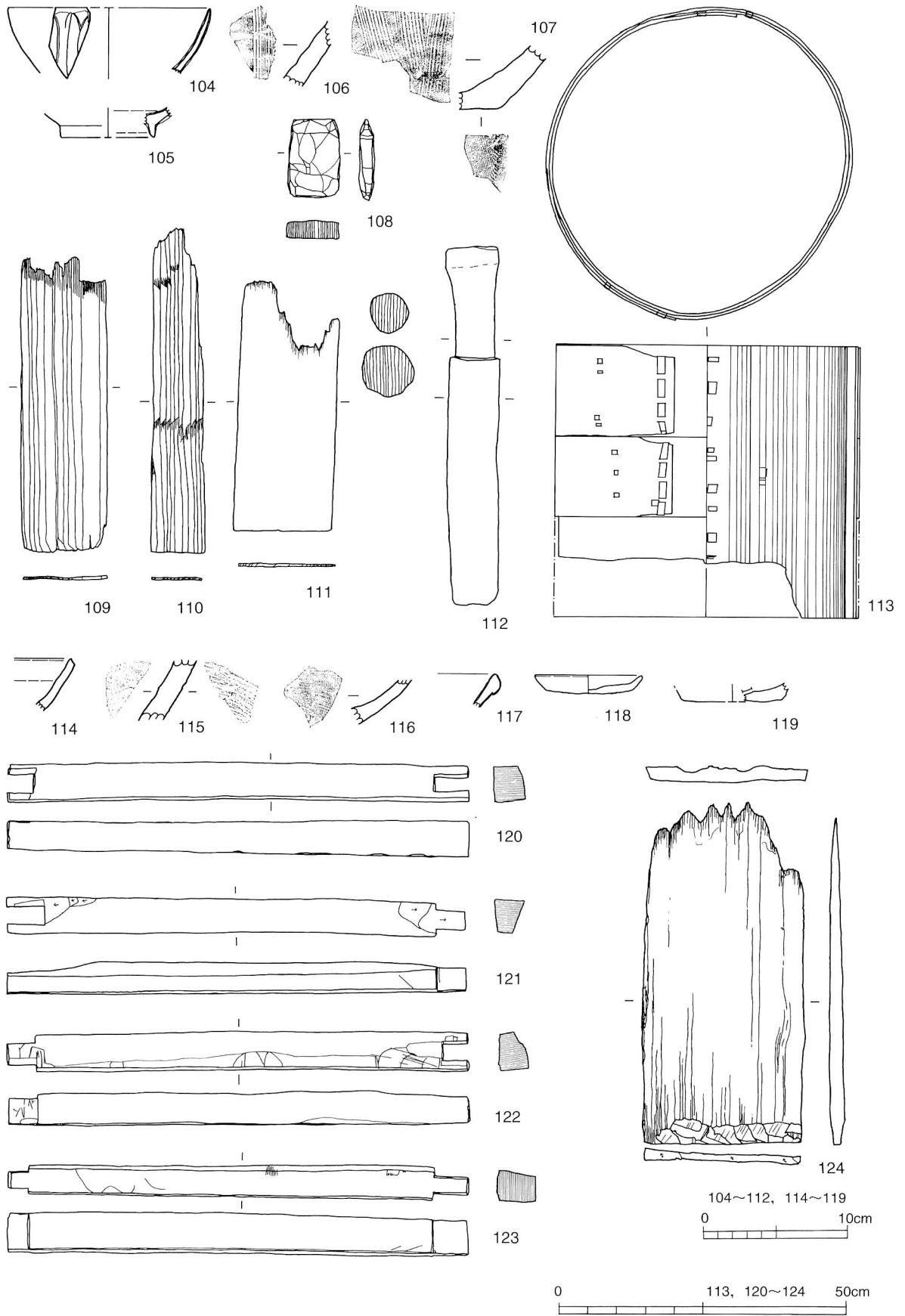


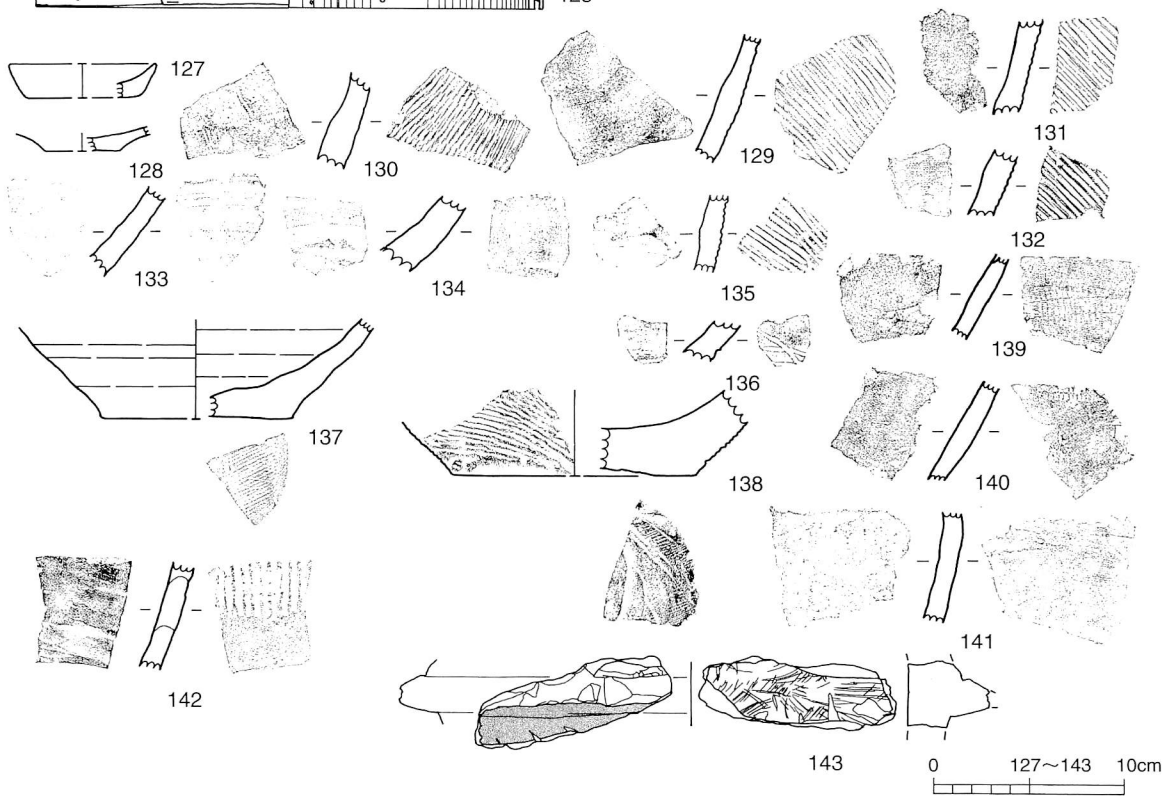
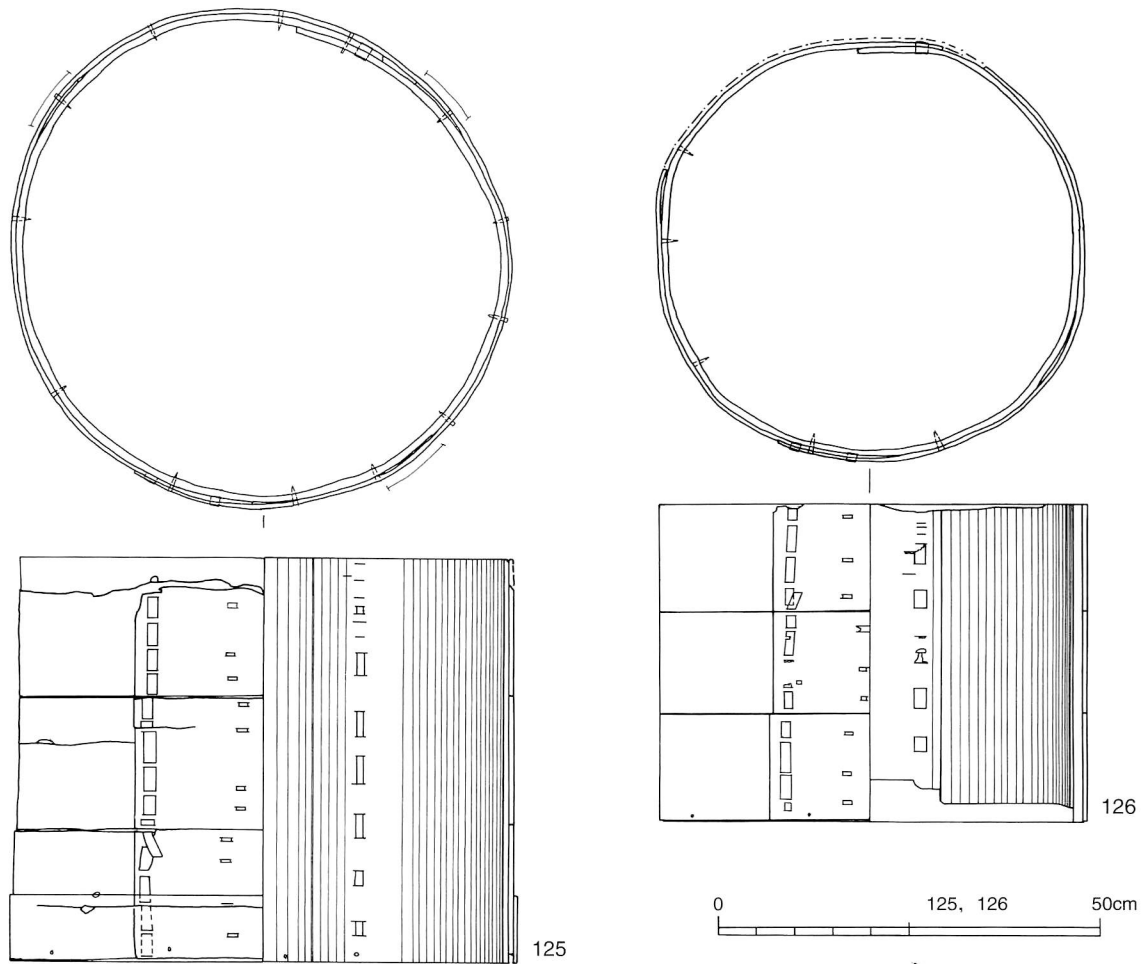
图版4 SK9出土遺物





図版6 SE14・17出土遺物

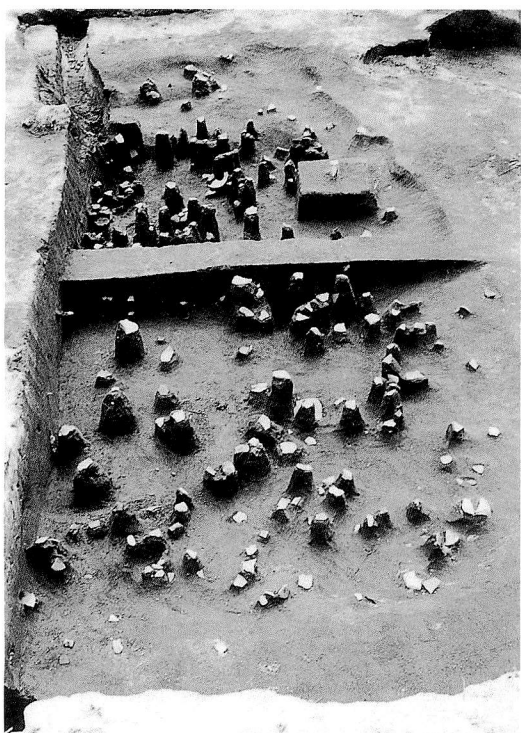




図版8 調査区 A 地区



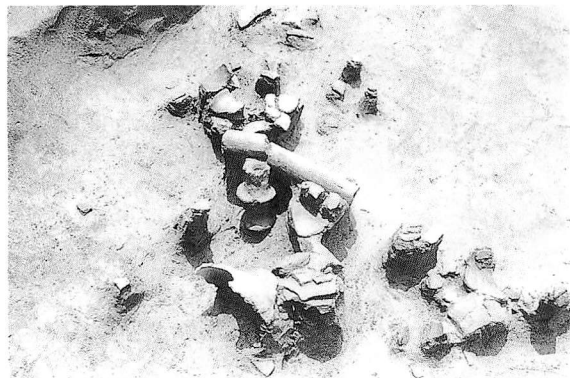
A地区全景（南から）



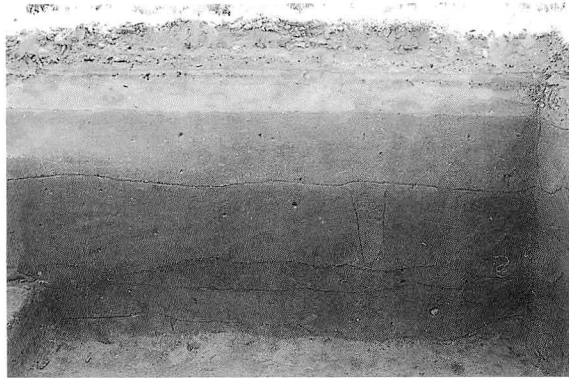
SX6 遺物出土状況



SX6 完掘状況



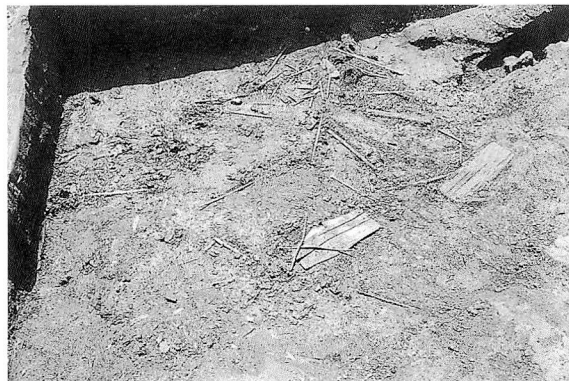
SX6カマド



A地区土層堆積状況



B地区全景（北から）



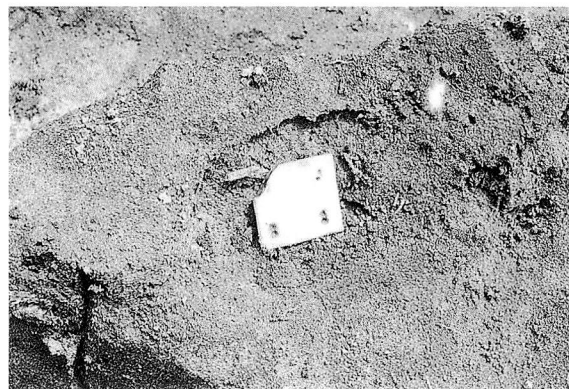
SK9 遺物出土状況



SK9 噴砂断面



SK9 完掘状況



石帯出土状況

図版10 井戸・調査風景



SE12



SE13



SE14



SE15



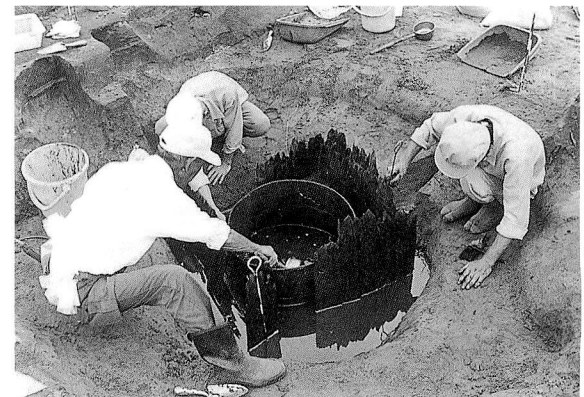
SE16



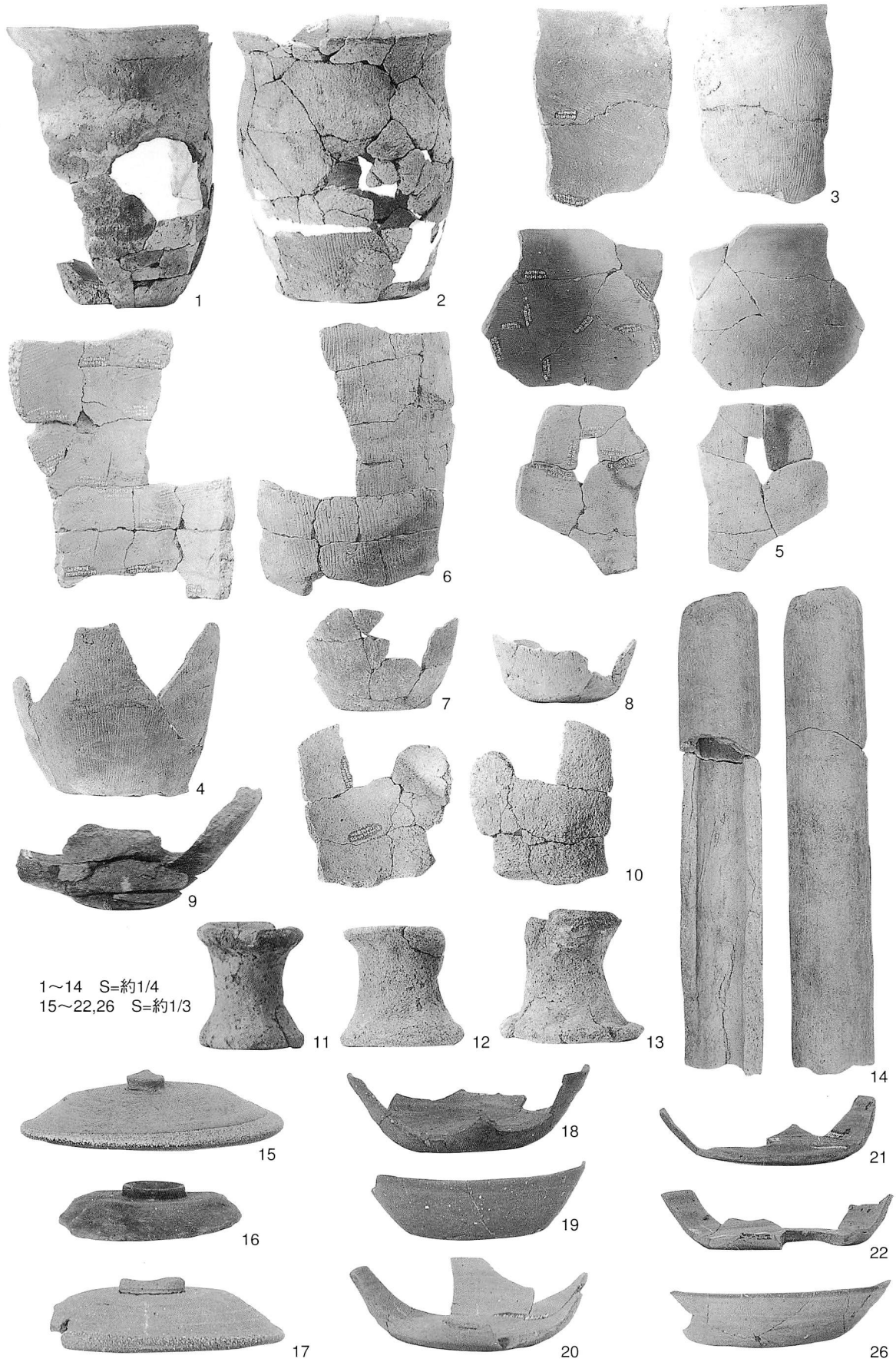
SE17



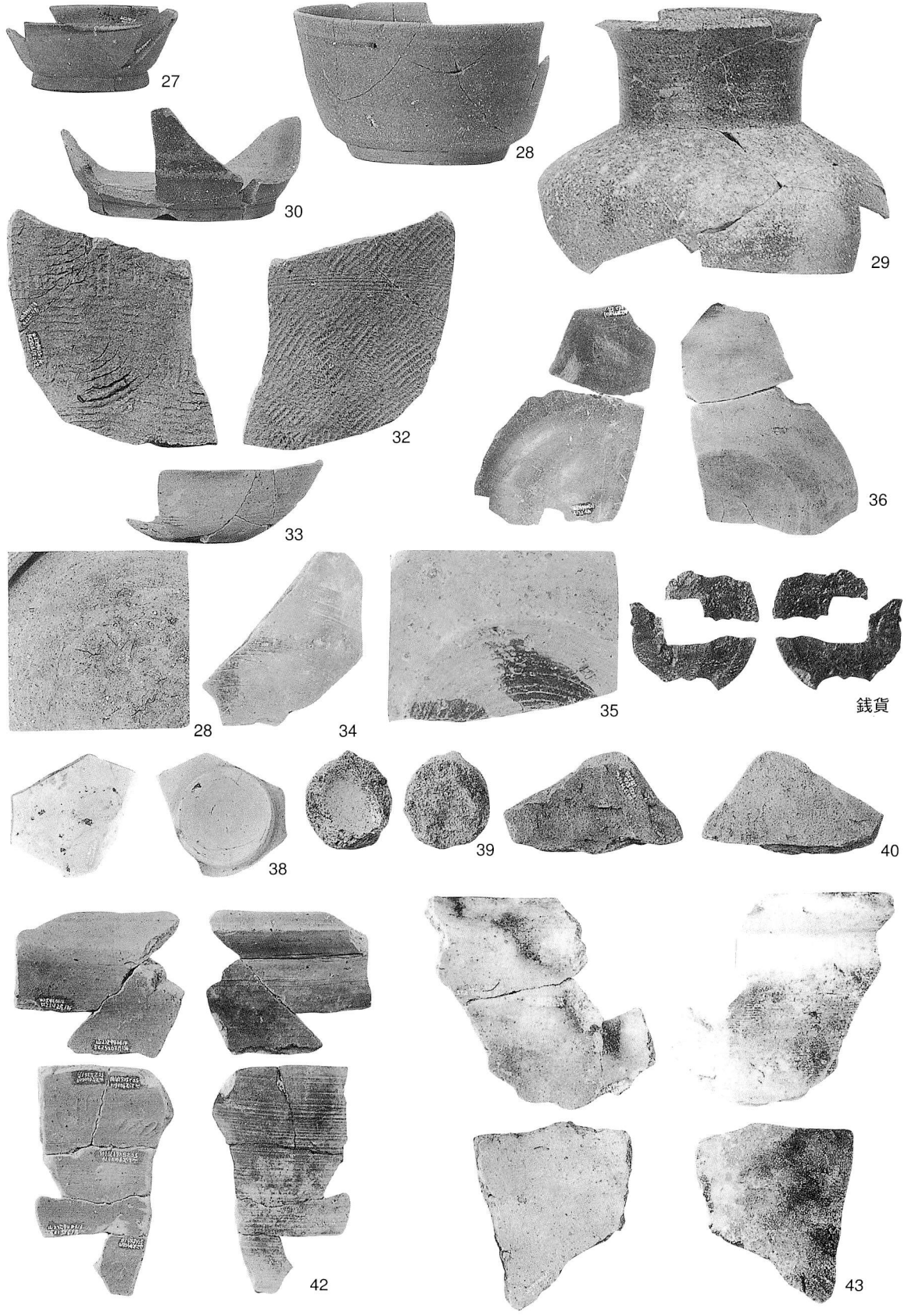
調査風景



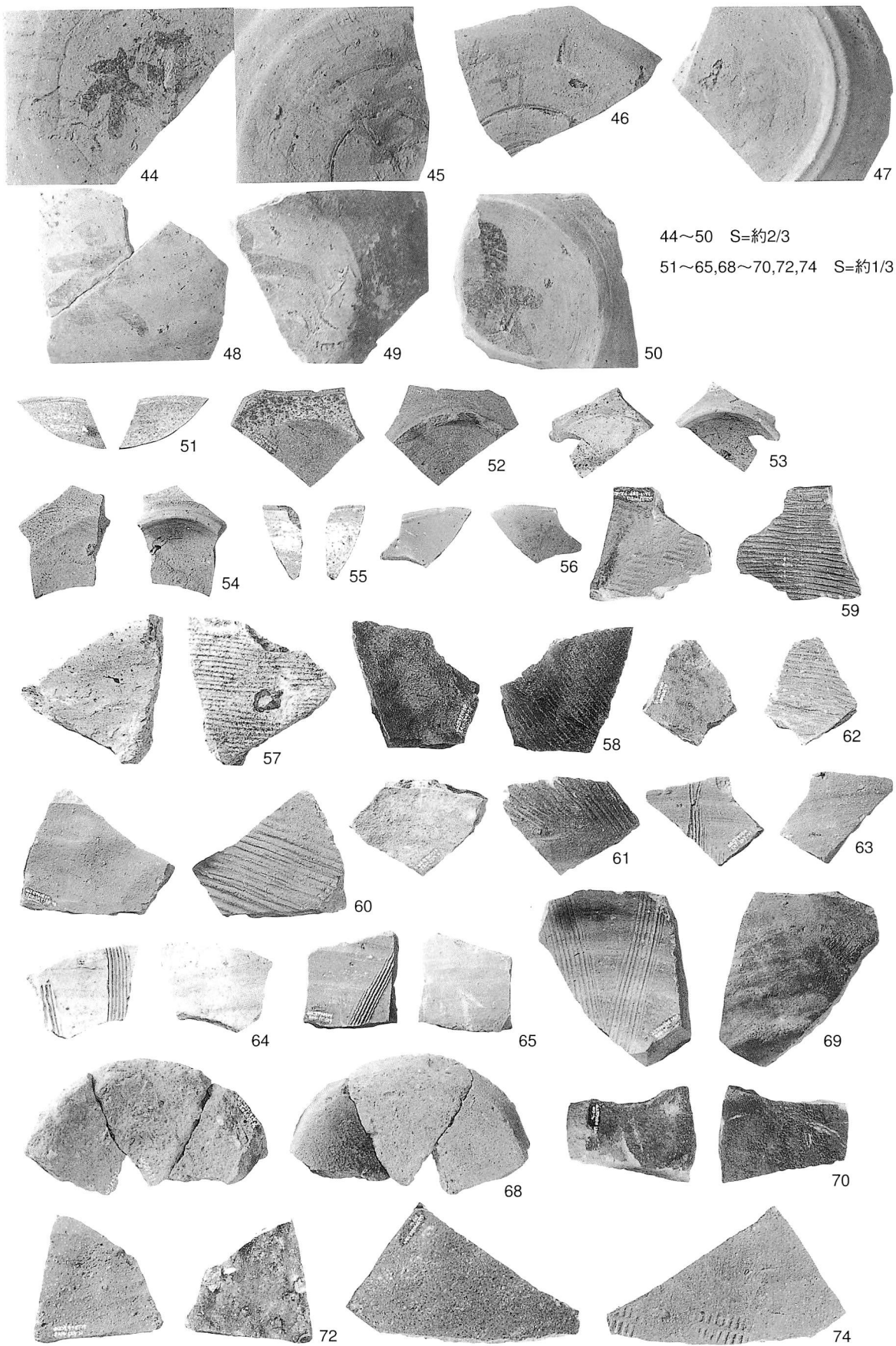
調査風景



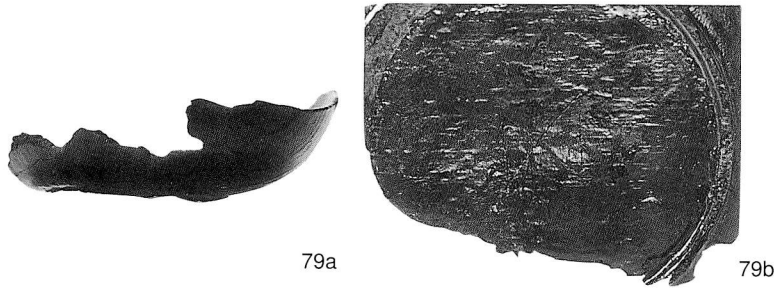
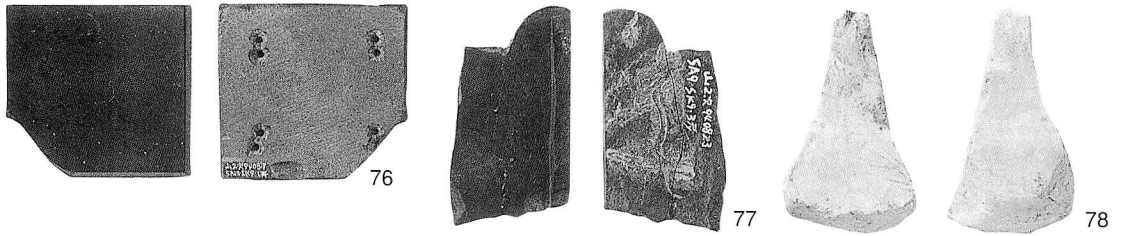
図版12 出土遺物(2)



S=約1/3 (銭貨は原寸大)



図版14 出土遺物(4)



76~78 S=約2/3

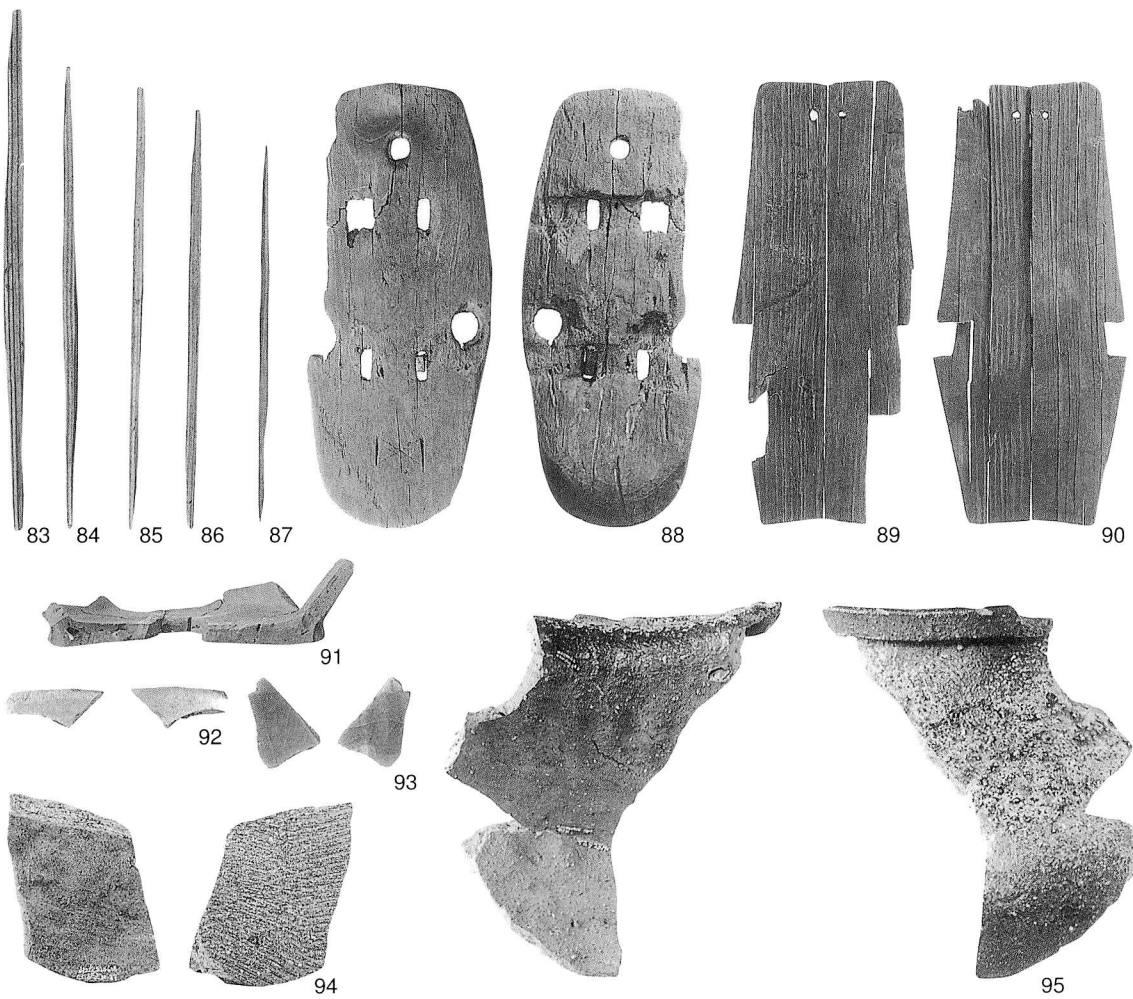
79a,b 縮尺不同

a: 漆椀正面

b: 漆椀底部外面刻目「 \times 」

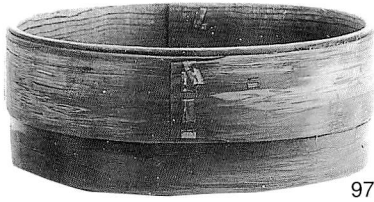
83~90,95 S=約1/4

91~94 S=約1/3





96



97

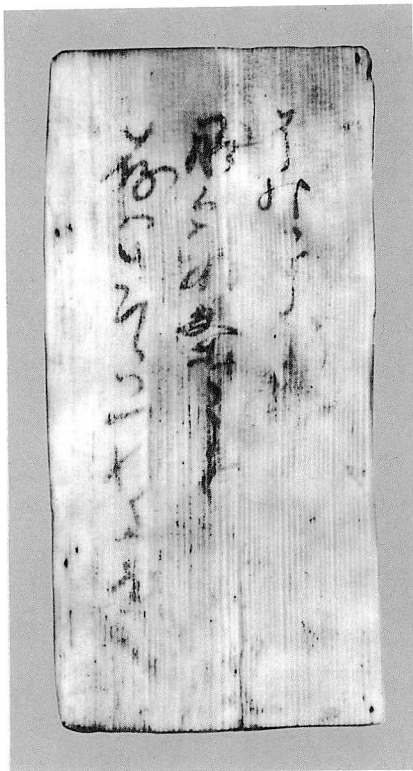


98

96~98,113,124 S=約1/10

103~107,114~119 S=約1/3

112 S=約1/4



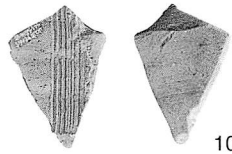
103



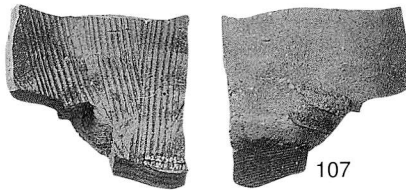
104



105



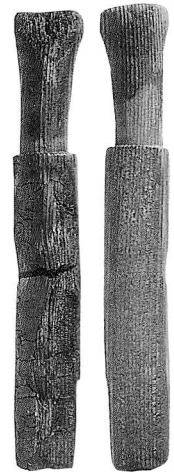
106



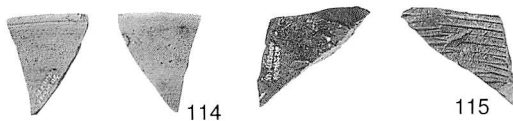
107



113

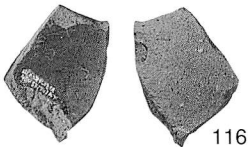


112



114

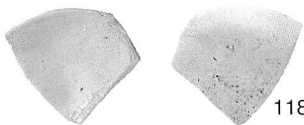
115



116



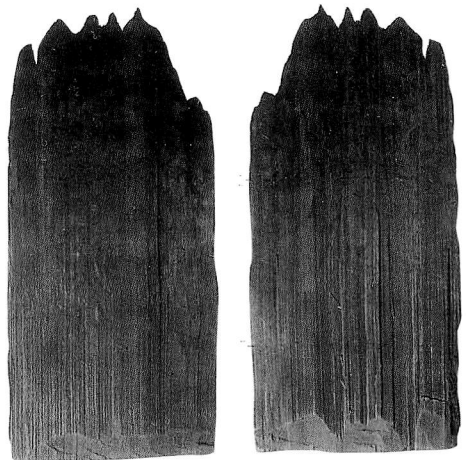
117



118



119

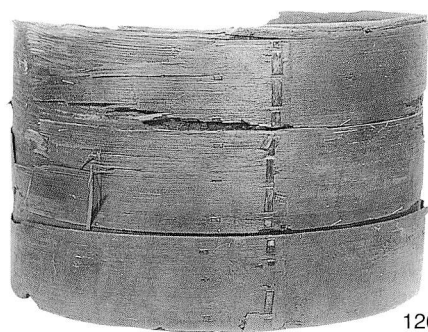


124

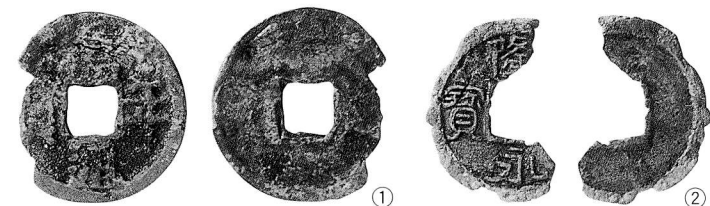
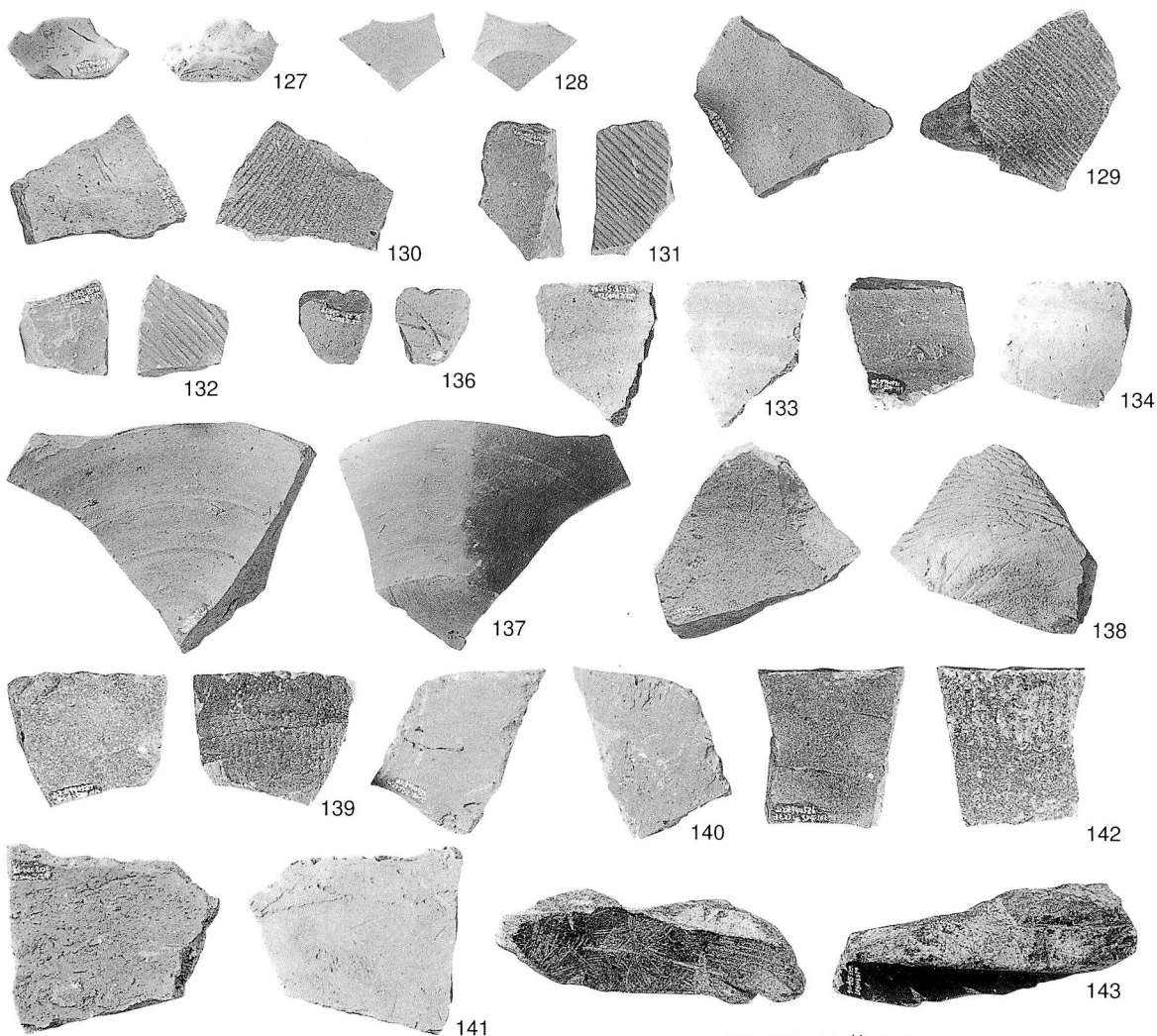
図版16 出土遺物(6)



125



126



125,126 S=約1/10

127~134,136~142 S=約1/3

143 S=約1/2

①萬年通宝 原寸大

②隆永通宝か 原寸大

報告書抄録

ふりがな	やまきどいせきだい2じはっくつちようさがいほう							
書名	山木戸遺跡第2次発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小池 邦明							
編集機関	新潟市教育委員会							
所在地	〒951-8550 新潟県新潟市1番町602番地1 TEL 025-228-1000代							
発行年月日	1999年 3月 31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまきど 山木戸	にいがたしやまきど 新潟市山木戸 386番地ほか	15201	112	37°55'4"	139°5'25"	平成6年5月9日 ~8月23日	597㎡	分譲宅地建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山木戸	集落	奈良時代 平安時代 中世	堅穴住居1棟 土坑5基 土坑11基・井戸6基・ 溝3基・柱穴		土師器・支脚・土管 須恵器・土師器・灰釉 陶器・緑釉陶器・銭貨・ 巡方・土錘 珠洲焼・瓷器糸陶器・ 白磁・青磁・曲物・ 墨書折敷・箸			

山木戸遺跡第2次発掘調査概報

1999(平成11)年3月31日発行

編集・刊行 新潟市教育委員会
〒951-8550 新潟市学校町通1番町602番地1

印刷 (有)太陽印刷所
〒950-0985 新潟市和合町2丁目4番18号
TEL. (025) 382-7651